

○司法省

福島縣ヨリ賠償金取
 扱方手續ノ義ニ付伺
 第一條 戸長役場ニ於
 テ人民ヨリ徴集シタ
 ル租税金ノ内盜難及
 村吏私借引負等ニ係
 ル分賠償方當時其筋
 へ及起訴置後日犯人
 處刑該金員納付ス可
 キ旨宣告相成候モ本
 人資力無之カ又ハ等
 閑ニシテ不致上納
 ハ其筋ヘ對シ身代限
 ノ處分ヲ請求ス可キ
 ハ勿論ニ可有之候得
 共該處分ノ上賠償金
 額ニ不足ヲ生スル
 ハ身代持直シ次第可
 致上納旨之証書差出
 サセ追テ徵收候義ニ
 可有之哉
 第二條 前條身代限處
 分ノ際ト雖モ先取ノ
 特權ヲ有スル義ト相
 心得可然哉

建設シ且又輸出入荷物等ヲ預置クヘキ借庫ヲ築造スヘシ尤藏敷料

及ヒ其他ノ事ハ別ニ其規則ヲ協議設定スヘシ

第二十四款 輸入荷物ノ税ヲ納メスシテ之レヲ海關倉庫ニ預ケント
 欲スルモノハ倉庫規則ニ從ヒ海關長ノ免許ヲ受ケサルヘカラス然
 ルトキハ右荷物ヲ再ヒ日本國ヘ積戻サントスルトキハ其マ、輸出
 スルヲ得ヘシ又既ニ納税シタル荷物ト雖トモ右倉庫内ヨリ直チニ
 積戻ニ於テハ其既納ノ税金ヲ返還スヘシ尤一旦荷主ノ許ニ引取タ
 ル荷物ハ第二十款ノ例ニ據ルヘシ但朝鮮政府ニテ借庫ヲ建築セサ
 ル間ハ荷物ヲ引取リタル後ト雖トモ原包ノマ、ナレハ海關ニ於テ
 既納ノ輸入税ヲ還付シ積戻スコトヲ許スヘシ尤一ケ年ヲ過ル者ハ
 第二十款ノ例ニ同シ

第二十五款 日本商船修復ノ爲メ其積荷ヲ陸揚スヘキコトアラハ關
 稅ヲ納メスシテ之ヲ陸揚シ海關所轄ノ上屋或ハ倉庫ニ入置キ(但
 藏敷料及諸雜費ハ船長ヨリ支辨スヘシ)修復濟ノ後之ヲ船積スル
 コトヲ得ヘシ然レモ若シ其荷物ヲ賣拂フコトアラハ相當ノ關稅ヲ納

明治十七年五月廿八日

指令

伺ノ趣左ノ通可心得

第一條 賠償金ノ不足
 ハ裁判所ヨリ明治八
 年第一百號布告証文
 真誓雛形ニ準シ身代
 持直シ次第皆濟ヲ受
 ク可キ旨ノ書面ヲ渡
 ス可キ旨ニ付還テ其書
 面ニ依リ還納ヲ受ク
 可キ儀ト心得ヘシ
 第二條 先取ノ特權ナ
 キ者ト心得ヘシ

明治十七年八月廿七日

○司法省

愛媛縣伺
 戸主身代限之節ハ土地
 建物並ニ記名アル公債
 證書ヲ除キ非戸主ノ所
 有ニ係ル動産物ハ總テ
 戸主財産ニ組込難賣相
 成例規ニ有之候得共其
 内非戸主ノ所有タルヲ
 明確ナル分取除クヘキ

ムヘシ又朝鮮海邊ニテ破損シタル船舶ノ船具及ヒ船用品ヲ賣却ス

ルトキハ其輸入税ヲ免除スヘシ

第二十六款 日本商船出港セント欲セハ拔錨前ニ船長或ハ其代理人
 ヨリ先ツ出港届書及ヒ輸出積荷目録ヲ海關ニ差出シ領事ノ船書預
 証書ヲ請戻シ出港免狀ヲ得テ後出港スヘシ

第二十七款 出港ノ手數ヲ爲シテリタル船舶都合ニ由リ再ヒ荷物ヲ
 船積シ若クハ船卸セシムル欲スルトキハ更ニ入港ノ手數ヲナシ出
 港スルトキハ亦出港ノ手數ヲナスヘシ又出港手數ノ濟ミタル上出
 港時期ニ及フト雖モ拔錨シ能ハサルトキハ船長或ハ其ノ代理人ヨ
 リ其旨ヲ海關ニ届出テ認可ヲ受クヘシ

第二十八款 船長出港免狀ヲ得ント欲スルモ海關諸規則ニ違犯スル
 ノ事件アリテ未タ裁判ヲ經サル間ハ海關ニ於テ之ヲ與ヘサルヘシ
 尤領事官ニ於テ船長ニ至當ノ引受人ヲ立シムルカ又ハ相當ノ保証
 金ヲ出サシメタル上海關長ニ通牒スルトキハ海關長ハ出港免狀ヲ
 與フヘシ

儀ニ候哉
前項若シ否ストナスト
キハ非且主カ篤行奇特
ノ行爲ニ據リ賜リタル
金銀木杯等ハ如何處分
致可然哉

明治十八年一月十九日

伺ノ趣左ノ通心得可シ
但主管ニ付當省ヨリ
指令ス

第一項 公債證書地所
ノ如キ成法上所有者
ノ記名アルモノニ非
サレハ取除ク可キ限
リニアラス

第二項 賞賜ニ係ル金
銀木杯等ハ差押フ可
キ限リニアラス

明治十八年二月十八日

第二十九款 郵船ハ同日若クハ同時ニ入港手數ト出港手數ヲ爲スコ
トヲ得ヘシ又輸入積荷目録ニハ其港ニ於テ陸揚シ若クハ船移スル
所ノ荷物ノ外之ヲ掲記スルコトヲ要セス又輸出積荷目録ハ船長ヨ
リ差出シ能ハサルトキハ其郵船會社ノ代理人ヨリ出港後三日内ニ
之ヲ指出スモ妨ケナシ

第三十款 船中ノ需用品ヲ求ムル爲メ若クハ災厄ヲ避ル爲メ朝鮮ノ
通商港ニ立寄リタル日本商船或ハ漁船ハ入港手數及ヒ出港手數ヲ
爲スニ及ハス但斯ノ如キ船舶ト雖トモ二十四時以上碇泊スルハ
其次第ヲ海關ヘ届出ツヘシ尤引續キ貿易ヲ爲ストキハ必ス第二款
ノ規則ニ從フヲ要ス

第三十一款 朝鮮政府ニ於テ後來通商各港内ヲ修理シ及ヒ燈臺標
ヲ設クヘシ尤之ヲ維持スル費用ニ充ツルカ爲メ日本商船ノ各通商
港ニ來航スルモノハ噸税トシテ每噸百貳拾五文ツ、ヲ納ムヘシ
(但何石積ト稱スル船ハ日本ノ六石五斗五升ヲ以テ一噸ト算定ス
ヘシ)右噸税ヲ納レハ海關ヨリ四ヶ月限ノ手形ヲ渡シ右期限中ハ

朝鮮國內何レノ通商港ニ到ルトモ復タ噸税ヲ納ムルニ及ハス又入
港ノ商船荷物ヲ陸揚セスシテ他所ニ赴カントスルモノ二日内ニ出
港スルトキハ噸税ヲ納ムルニ及ハス尤風雨或ハ大霧等ニテ出港シ
難キモノハ其ノ次第ヲ海關ニ届出ツヘシ但漁船ハ噸税ヲ納メス尤
噸税ハ他國ノ商船若シ日本船ト同數ノ多キニ至レハ公同協議シテ
改定スルコト有ルヘシ

第三十二款 軍艦其他日本政府ニ屬シ商品ヲ搭載セサル船舶ノ朝鮮
國通商港ニ到ルモノハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲ナスコトナク又
噸税ヲ拂フコトナク且海關官吏之ヲ監守スルコト莫ルヘシ然レト
モ其船中所用品ノ内不用ノ分ヲ陸揚シテ之ヲ賣拂フトキハ其買主
ヨリ之ヲ海關ニ届出テ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ

第三十三款 日本商船若シ朝鮮國ノ不開港場ニ於テ密商シ或ハ密
セント謀ルモノアラハ該商品ハ勿論其搭載スル所ノ商品ヲ朝鮮政
府ニ沒收シ船長ニ五十萬文ノ罰金ヲ課スヘシ但風波ノ難ヲ避ケ或
ハ薪水食料ヲ求ムル爲メニ一時寄泊スル者ハ此例ニ非ス

第三十四款 朝鮮國政府又ハ人民ニテ荷物人員等ヲ不開口岸ニ運送セント欲スルハ日本商船ヲ雇入ル、コトヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ヲ得テ之ヲ備使スヘシ

第三十五款 此規則中ニ掲クル所ノ罰金沒收及ヒ其他ノ罰則ニ關スル事件ハ海關長ノ告訴ニ因リ日本領事官ニ於テ之ヲ裁斷スヘシ尤其ノ取立タル罰金及ヒ沒收シタル物品ハ總テ朝鮮政府ノ收領スル所ロトス故ヘニ朝鮮官吏ノ差押ヘタル物品ハ該官吏ト日本領事官ト立會ノ上ニテ之レニ封印ヲ施コシ裁斷了ルマテ海關ニ留置クヘシ若シ領事官ニ於テ之ヲ無罰ニ決スルトキハ其物品ハ領事ヲ經テ荷主ヘ引渡スコト勿論タリト雖トモ朝鮮官吏若シ其裁判ニ服セサルトキハ日本國相當ノ裁判所ヘ控訴スヘシ然ルトキハ荷主ハ其物品ノ代價ヲ裁判完結ニ至ルマテ領事館ニ預ケ置クヘシ若シ其差押ユル所ノ物品腐敗變態質或ハ危險質ニ係レハ其代價ヲ領事館ニ預リ置キ物品ハ荷主ニ渡スヘシ

第三十六款 鴉片ハ輸入ヲ嚴禁ス若シ鴉片ヲ密輸シ或ハ密輸セント

課ルモノアラハ其品沒收ノ上密輸高一斤ニ付七千文ツ、ノ罰金ヲ課スヘシ但朝鮮政府需用ノ爲メ輸入スルカ又ハ在留日本人民藥用ノ爲メニ日本領事官ノ証明ヲ經テ輸入スルモノハ此限ニアラス

第三十七款 若シ朝鮮國水旱或ハ兵擾等ノ事故アリ境内缺食ヲ致スヲ恐レ朝鮮政府暫ク米糧ノ輸出ヲ禁セント欲セハ須ク其期ニ先メツニケ月前ニ於テ地方官ヨリ日本領事官ニ照知スヘシ然ルトキハ豫メ其期ヲ在各港ノ日本商民ニ轉示シ一體遵守セムヘシ米穀類ハ進口出口トモニ五分稅ヲ課スト雖トモ如シ朝鮮國ニ災荒アリテ進口ヲ要シ或ハ日本國ニ災荒アリテ出口ヲ要スルトキハ照知ヲ經テ進出稅ヲ免スヘシ

第三十八款 大小砲銃諸種彈丸火藥雷粉其他一切ノ軍器ハ朝鮮政府又ハ朝鮮政府ヨリ軍器買入ノ免許ヲ受ケタル朝鮮人ヲ除クノ外朝鮮人民ヘ賣渡スコトヲ許サス若シ之ヲ密賣スル者アラハ其品ヲ沒收スヘシ

第三十九款 此規則中罰科ヲ掲ケサル條款ニ違背スル者アルトキハ

壹萬五千文以下ノ罰金ヲ課スヘシ

第四十款 此規則ニ定ムル所ノ稅銀及ヒ罰金ハ朝鮮銅錢ヲ以テ之ヲ納ムヘシ或ハ日本銀貨ヲ以テ時ノ相場ニ從ヒ換用スヘシ尤墨西哥弗ハ日本銀貨ト同價ナルヲ以テ之ヲ換用スルモ亦妨ケナシ又第二第三第四第六第三十三ノ諸款ニ掲クル所ノ罰金及ヒ手數料ハ其商船五百噸以下ハ二分ノ一ヲ科シ五拾噸以下ハ四分ノ一ヲ科スヘシ
第四十一款 日本國漁船ハ朝鮮國全羅慶尙江原咸鏡ノ四道朝鮮國漁船ハ日本國肥前筑前長門(朝鮮海ニ面スル所)石見出雲對馬ノ海濱ニ往來捕魚スルヲ聽スト雖トモ私ニ貨物ヲ以テ貿易スルヲ許サズ違フ者ハ其品ヲ沒收スヘシ但其所獲ノ魚介ヲ賣買スルハ此例ニ非ス其彼此應納ノ魚稅及ヒ其他ノ細目ニ至テハ遵行兩年ノ後其景況ニ隨ヒ更ニ協議酌定スヘシ

第四十二款 此規則ハ調印ノ日ヨリ百日内ニ日本朝鮮兩政府ノ允准ヲ經ヘキモノニシテ右百日經過ノ後直チニ之ヲ實踐スヘシ然ルトキハ從來ノ貿易規則及ヒ其他ノ諸約書中此規則ノ諸條款ニ抵觸ス

ルモノハ總テ其効ヲ失フモノトス尤現時若クハ後來朝鮮政府何等ノ權利特典及ヒ惠政恩遇ニ論ナク他國官民ニ施及スルモノアラハ日本國官民モ亦猶豫ナク一體均霑スルヲ得又此規則ハ實踐ノ日ヨリ五箇年ヲ以テ期トス故ニ其ノ滿期前ニ於テ兩國政府更ニ協議ヲ遂ケ新規則ヲ設立スルヲ要ス但若シ協議中其ノ期ヲ過クルヲアルモ新規則設立マテハ此ノ規則ニ據テ辦理スルモノトス且又兩國ノ官吏此ノ規則内ニ掲載セサル條款ヲ增加スルヲ以テ彼此共ニ必要ト考フ時ハ隨時商議ヲ開クヲ得ヘシ
右証據トシテ兩國ノ全權大臣此條約ニ名ヲ記シ印ヲ調スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使竹添進一郎印

全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆印

朝鮮國海關稅目

輸入之部

第一 藥材製藥及香料

○五分稅 (從價)

- 一藥材 他項ニ掲ル者ヲ除ク
- 一膠(各種)
- 一樟腦
- 一諸製藥類
- 一明礬

○壹割稅 (從價)

- 一龍腦
- 一丁香
- 一麝香

○貳割稅 (從價)

- 一安息香
- 一乳香
- 一沉香
- 一白檀
- 一甘松
- 一線香
- 一其外香料

第二 染料及顏料

○八分稅 (從價)

- 一乾藍水藍
- 一漆
- 一蘇木及蘇木越幾斯
- 一五倍子
- 一紅花
- 一染粉
- 一其他別項ニ掲
- 載セサル一切ノ染料
- 一色油
- 一各色鉛粉
- 一洋漆
- 一紺青
- 一雌黃

- 一郡青
- 一綠青
- 一朱
- 一其他別項ニ掲

載セサル一切ノ顏料

第三 金屬及金屬製品類

○五分稅 (從價)

一日本銅

○八分稅 (從價)

- 一鍍鋼、鉛、錫、汞、夾金其他別項ニ掲ケサル諸金屬類(塊錠條桿板葉等ノ別ナク)
- 一鐵線及銅線
- 一銅鐵釘類
- 一水銀
- 一ソルター
- 一白銅
- 一アンチモニー
- 一鍋釜刃物及鉄
- 製アリキ製其他總テ金屬製品類

○壹割稅 (從價)

一金銀銅錫ノ箔類

○貳割稅 (從價)

一金銀器及鍍金銀器

第四 油蠟脂類

○五分稅 (從價)

一石炭油

○八分稅 (從價)

一諸種ノ油別項ニ掲ケサルモノ 一蜜蠟木蠟 一瀝青及タール

一獸蠟 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ油蠟脂類

一樺ノ油 一レーブ 一セサナン 一蠟燭

一髮付油 一氣油

第五 布帛類

○八分稅 (從價)

一生平 一海黃 一綉 一綸子

一郡内 一絹紹 一綿純子、綿縹子、綿紋縹子、綿綸子

一生金巾 一白金巾 一唐綾 一雲齋小倉織紋

羽類 一天竺布 一寒冷紗 一緋金巾、色金巾

紋金巾、綾金巾 一左良紗 一綿紹 一綿天鵝絨

一紋幟巾、壽巾 一純毛吳呂 一綾吳呂 一畔呂

一フイチル(純駁ノ別ナク) 一モヘイル(全) 一毛縹子

一縮緬吳呂(純駁ノ別ナク) 一純毛羅紗 一綿毛羅紗

一毛純子羅世板セルチス、スバニススライプス(純駁ノ別ナク)

一アルバカ 一麻布麻綿布、及麻毛布類(生色白色ノ別ナク)

一臥蠶^{フランシト} 一帆布(綿麻共)

一其他別項ニ掲載セサル一切ノ絹綿毛及麻布ノ類 一油布蠟布

○壹割稅 (從價)

一紗 一縮緬 一琥珀 一羽二重

一緞子、縹子、綾類

○貳割稅 (從價)

一天鵝絨 一諸種地氈類^{カルベット}

第六 文具紙類

○五分稅 (從價)

一日本人自用雜紙

○八分稅 (從價)

- 一印刷用洋紙(何國製ニ拘ラズ)
- 一包裝用洋紙 一諸日本紙 一墨池、封筒、鉛筆、洋筆、毛筆、石盤等
- 一各種墨
- 壹割稅 (從價)
- 一色紙 一紋紙 一印紙 一印肉
- 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ文具紙類
- 第七 飲食物及烟草類
- 五分稅 (從價)
- 一穀物穀粉 一生水菓 一日本人所食ノ物
- 一味噌醬油及酢
- 八分稅 (從價)
- 一鹽 一茶 一醃肉、醃魚、及罐詰食料
- 一素麵 一葛粉 一寒天 一落花生豆
- 一檸檬水、生姜水、曹達水及諸飲料類 一其他別項ニ掲
- 載セサル一切ノ飲食物類 一白黑砂糖 一糖蜜糖水

- 一日本酒 一清國酒 一林檎酒
- 壹割稅 (從價)
- 一麥酒(諸酒ノ) 一赤白葡萄酒
- 壹割五分稅 (從價)
- 一冰糖精製糖 一果子類
- 貳割稅 (從價)
- 一卷烟草紙卷烟草其他一切ノ烟葉
- 貳割五分稅 (從價)
- 一ウエルムート 一ポルト 一シエリ
- 三割稅 (從價)
- 一ブランデー 一ウイスキー 一シヤンペイン 一櫻酒
- 一杜松子酒 一リキウル 一糖酒 一燒酎及泡盛
- 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ酒類
- 第八 雜貨
- 五分稅 (從價)

- 一 石炭及コークス
- 一 家根板
- 一 砥石
- 一 靴其他履及傘
- 一 臺、箆筒、盆及總テ木製器具
- 八分税(從價)
- 一 木材竹材石材
- 一 綿糸
- 一 羊毛其他獸毛
- 一 綿子、菓子、麻子、亞麻子
- 一 弗箱
- 一 別項ニ掲載セサル一切ノ雜貨
- 一 衣服帽幘其他服飾品
- 一 扇及團扇類
- 一 一日本人常用器具
- 一 一襖、障子
- 一 一砂紙
- 一 一靴其他履及傘
- 一 一臺、箆筒、盆及總テ木製器具
- 一 一煉化石及瓦
- 一 一生糸熨斗糸屑糸
- 一 一苧麻
- 一 一器械
- 一 一器載セサル一切ノ雜貨
- 一 一衣服帽幘其他服飾品
- 一 一齒磨
- 一 一皮、角、骨、牙、蹄、羽毛類(工ヲ經サ
ルモノ)
- 一 一木炭
- 一 一藤
- 一 一胡麻子
- 一 一食器用、磁器陶器類
- 一 一臥床、椅子、其他家具
- 一 一目鏡
- 一 一象牙及一角牙
- 一 一鏡
- 一 一諸玻璃器類(別項ニ載セサル者)
- 一 一紫檀、黑檀、アイクス木、黃楊木、鉄
- 一 一蝙蝠傘(絹製鐵幹)
- 一 一寫真器
- 一 一樂器
- 一 一鈕釦扣子類
- 一 一鑛山使用ノ爆發物
- 壹割五分税(從價)
- 一 一烟管及烟囊
- 貳割税(從價)
- 一 一時辰鐘、及時辰表并其部分品類
- 貳割五分税(從價)
- 一 一寫真
- 一 一繪甲細工類
- 一 一花筒、置物其他室内裝飾品ニ屬スルモノ
- 一 一繪畫(装ノ有無ニ拘ラス)
- 一 一彫刻物

- 一 洋燈及其部分
- 壹割税(從價)
- 一 熟皮類
- 一 鏡類(廓ノ有無ニ拘ラス)
- 一 刀木及總テ堅硬木
- 一 旅櫃、提囊、及佩袋類
- 一 鈕釦扣子類
- 壹割五分税(從價)
- 一 烟管及烟囊
- 貳割税(從價)
- 一 一時辰鐘、及時辰表并其部分品類
- 貳割五分税(從價)
- 一 寫真
- 一 繪甲細工類
- 一 花筒、置物其他室内裝飾品ニ屬スルモノ
- 一 繪畫(装ノ有無ニ拘ラス)
- 一 彫刻物
- 一 馬具及馬車
- 一 諸玻璃器類(別項ニ載セサル者)
- 一 紫檀、黑檀、アイクス木、黃楊木、鉄
- 一 蝙蝠傘(絹製鐵幹)
- 一 寫真器
- 一 樂器
- 一 鑛山使用ノ爆發物
- 壹割五分税(從價)
- 一 烟管及烟囊
- 貳割税(從價)
- 一 一時辰鐘、及時辰表并其部分品類
- 貳割五分税(從價)
- 一 寫真
- 一 繪甲細工類
- 一 花筒、置物其他室内裝飾品ニ屬スルモノ
- 一 繪畫(装ノ有無ニ拘ラス)
- 一 彫刻物
- 一 玩具
- 一 首飾品
- 一 毛皮、狐、獺、獺、海狸、兔等ノ類

○三割稅（從價）

- 一 烟花類
- 一 玻璃珠
- 一 獵銃及其使用品
- 一 珊瑚珠
- 一 眞珠及寶石類
- 一 衝球象棋骨牌
- 一 其他一切ノ遊戯品

第九 船舶

- 一 蒸氣船 每噸 銅錢貳百五十文
- 一 風帆船 每噸 銅錢百貳十五文

第十 免稅品

- 一 貨幣
- 一 金銀地金
- 一 旅客行李ノ具
- 一 貨物見本（相當ノ額數）
- 一 新聞紙
- 一 廣告紙類
- 一 書籍地圖海圖
- 一 招牌
- 一 修藝勸業ノ雛形類
- 一 農具
- 一 醫術用器具
- 一 尺度衡量寒暖計晴雨儀驗液器針盤其他學術用器具并其使用品
- 一 活字（新古ノ別ナク）
- 一 消防器具
- 一 船用具（若シ不用ノ者ヲ陸上シテ競賣スル者ハ仍ホ定稅ヲ徵ス）
- 一 包裝諸席蓆蓆及繩類（貨物包裝ニ用フヘキ）

第十一 禁制品

- 一 鴉片（藥用鴉片ヲ除ク）
- 一 偽藥
- 一 擬造貨幣類
- 一 淫猥私褻ノ畫圖肖像
- 一 軍器類（凡ソ軍械ノ式樣及ヒ防身ノ物件ハ須ラク領事官ニテ朝官ノ准單ヲ收到シタル上方ニ進口ヲ准ス但出賣スルヲ准サス）

朝鮮國海關稅目

輸出ノ部

○免稅

- 一 貨幣
- 一 金銀地金及砂金
- 一 旅客行李ノ具

○五分稅（從價）

- 一 別項ニ掲載セサル一切ノ輸出品

○壹割五分稅（從價）

- 一 紅蔘（朝鮮ノ商民日本ニ帶入スルトキハ應ニ一割五分ノ稅ヲ納ムヘシ如シ日本ノ商民朝鮮政府ノ特許ヲ經スシテ私カニ輸出スル者アレハ查出沒收スヘシ）

右証據トシテ兩國ノ全權大臣此税目ニ名ヲ記シ印ヲ蓋スル者也
大日本國明治十六年七月二十五日
大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使竹添進一郎印
全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆印

○第二款

第一節

金銀分析

○五年三月第六十八號布告

金銀分析ノ儀自今無願營業禁止候條地方官ニ於テ不取締無之樣可致
候尤開業致度段願出候者有之候ハ、其者ノ身元並ニ開業ノ規則等詳
細取調大藏省ヘ可伺出候事

第二節

銘紙贋造

○十年二月內務省丙第十號達 東京府大坂府五港

諸印紙類贋造制禁ノ儀ハ人民熟知ノ筈ニ有之候所往々舶來麥酒等ヘ
貼付ノ銘紙ヲ贋造シ販賣致シ候向モ有之哉ニ相聞候條以來古銘紙等

贋造不致樣管下人民ヘ可相達此旨相達候事

○第四編 訴訟

第一類 裁判所

○第一章

○第一款 裁判所

第一節 各裁判所位地及管轄區畫

○十六年一月第二號布告

明治十四年(十月)第五十三號同十五年(六月)第二十八號布告各裁判所ノ位置及ヒ管轄區畫別表ノ通改定シ始審裁判所支廳ハ本廳同一ノ權限ヲ以テ裁判セシム但明治十六年二月一日ヨリ施行ス

裁判所一覽表

控 始 審	訴 本 廳 支 廳	治 安 府	縣 國 名	區 郡 名

裁															訴															控		
甲府					静岡					前橋					浦和					栃木												
															熊谷					宇都宮												
谷村		甲府			掛川		濱松		沼津		下田		静岡		太田		高崎		前橋		大宮		熊谷		浦和		宇都宮	栃木				
山梨縣					遠江					駿河					武藏					栃木縣												
北都留					山名周智					伊豆那加					新田山田					河內												
西八代					豐田磐田					伊豆那加					新田山田					上野												
南中巨摩					長上敷知引					那加茂内					山田邑樂					下野												
北巨摩					佐野榛原					加茂内					邑樂					上野												
東八代					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
西八代					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
南中巨摩					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
北巨摩					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
東八代					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
西八代					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
南中巨摩					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												
北巨摩					佐野榛原					那加茂内					邑樂					上野												

大															京															東		
水戸					千葉					横濱					東京																	
															八王子					芝橋區												
下妻		土浦			水戸		八日市場		千葉		小田原		横濱		本所區		下谷區		麹町區		芝橋區		京橋區		東京府	武藏						
茨城縣					水戸					千葉縣					神奈川縣					武藏					日本橋區							
下總					常陸					常陸					相模					武藏					京橋區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							
北相馬					新治筑波					河內信太					久慈多賀					鹿島内					芝區							

大阪												京都											
大坂						宮津宮津						相川高田											
奈良	奈良	堺	天王寺	中ノ島	宮津	福知山	園部	伏見	京都	相川	系魚川	高田	高田	高田	高田	高田	高田						
大坂府						京都府																	
大和		和泉		攝津		丹波		山城		佐渡		東頸城		中頸城		西頸城							
葛下ノ内		宇智吉野葛上忍海高市ノ内		添上添下山邊平群式上式下十市廣瀬宇陀高市ノ内葛下ノ内		丹北ノ内大和川以南		堺區全國四郡安宿丹南八上古市石川錦部志紀ノ内		丹北ノ内大和川以北		大縣南區東成住吉高安志紀ノ内		攝津西區北區西成島上島下豐島能勢		丹波丹波加佐ノ内		船井南桑田					
						乙訓紀伊久世相樂綴喜宇治ノ内		上京區愛宕葛野宇治ノ内		全國三郡													

新瀨												長野											
新瀨						上田						長野											
長岡	新發田	新發田	新瀨	新瀨	上田	上田	福島	大町	飯田	松本	飯山	長野	飯山	飯山	飯山	飯山	飯山	飯山					
新潟縣越後						長野縣信濃																	
中魚沼		刈羽ノ内		古志北魚沼三島刈羽ノ内		岩船		北蒲原		新瀨區西中蒲原		南佐久		小縣植科ノ内更級ノ内		西筑摩ノ内		東筑摩ノ内南安曇ノ内					
												上伊奈ノ内諏訪		上伊奈ノ内下伊奈		下高井上水内ノ内下水内		上水内ノ内上高井更級ノ内植科ノ内					

審 判 所												
高 知		德 島		和 歌 山		金 澤 富 山 魚 津 石 川 縣 越 中						
中 村	高 知	脇 町	德 島	田 邊	和 歌 山	輪 島	七 尾	高 岡	魚 津	富 山	小 松	金 澤
松 山	中 村	高 知	脇 町	德 島	田 邊	和 歌 山	輪 島	七 尾	高 岡	魚 津	富 山	小 松
高知縣土佐		德島縣阿波		和歌山縣紀伊		能登		射水		加賀		越中
野間桑風早 上 浮穴和氣伊豫 温泉 下		幡多		安藝香美長岡土佐吾川高岡		美馬三好麻植阿波		名東名西勝浦那賀海部板野		日高 東 西 牟婁		和歌山區伊都那賀名草海部有田
						球洲 鳳至		鹿島 羽咋		上新川 婦負		能美 江沼
												加賀金澤區 河北 石川

裁 判 所												
福 井		大 津		岡 山			神 戶					
小 濱	敦 賀	大 野	福 井	大 津	岡 山	高 岡	玉 島	岡 山	豐 岡	姫 路	洲 本	神 戶
敦 賀	小 濱	大 野	福 井	大 津	岡 山	高 岡	玉 島	岡 山	豐 岡	姫 路	洲 本	神 戶
福井縣		滋賀縣		岡山縣			兵庫縣					
越前	若狹	越前	近江	美作	備中	播磨	淡路	丹波	播磨	攝津	神戶區八郡	荒原武庫川邊有馬
若狹 敦賀	遠敷 大飯	大野	南條今立丹生吉田坂井足羽	滋賀野洲甲賀栗太蒲生高島	神崎愛智犬上坂田伊香 西 淺井	全國十二郡	上房阿賀哲多川上加陽ノ内	小田 後月 下道 窪屋 淺口	多可 加西 印南 神東 神西 飾東 飾西 赤穂 加東 加古	淡路 全國二郡	丹波 多紀 氷上	播磨 明石 美嚢
若狹 敦賀	遠敷 大飯	大野	南條今立丹生吉田坂井足羽	滋賀野洲甲賀栗太蒲生高島	神崎愛智犬上坂田伊香 西 淺井	全國十二郡	上房阿賀哲多川上加陽ノ内	小田 後月 下道 窪屋 淺口	多可 加西 印南 神東 神西 飾東 飾西 赤穂 加東 加古	淡路 全國二郡	丹波 多紀 氷上	播磨 明石 美嚢

所 判 裁 訴 控 島 廣															所 判 岐 阜				
松										山 口					廣 島				
濱 田										萩 赤間關 岩 國 山 口					尾 道 尾 道		三 次 廣 島 縣		
西 鄉 西 鄉										今 市 松 江							高 山 御 嵩 大 垣 岐 阜 縣 美 濃		
島 根 縣										山 口 縣							飛 彈 全 國 三 郡		
石 見 那 賀 邑 智 邇 摩 美 濃 鹿 足										出 雲 大 原 意 宇 能 義 秋 鹿 島 根 仁 多					備 後 三 谷 奴 可 三 上 三 次 志 蘇		安 藝 廣 島 區 沼 田 安 藝 佐 伯 山 縣 高 宮 加 茂 豐 田		
隱 岐 全 國 四 郡										長 門 赤 間 關 區 厚 狹 豐 浦					周 防 美 禰 佐 波 吉 敷		安 藝 廣 島 區 沼 田 安 藝 佐 伯 山 縣 高 宮 加 茂 豐 田		
										大 津 河 武 見 島					備 後 三 谷 奴 可 三 上 三 次 志 蘇		安 藝 廣 島 區 沼 田 安 藝 佐 伯 山 縣 高 宮 加 茂 豐 田		
										出 雲 大 原 意 宇 能 義 秋 鹿 島 根 仁 多					備 後 三 谷 奴 可 三 上 三 次 志 蘇		安 藝 廣 島 區 沼 田 安 藝 佐 伯 山 縣 高 宮 加 茂 豐 田		
										大 津 河 武 見 島					備 後 三 谷 奴 可 三 上 三 次 志 蘇		安 藝 廣 島 區 沼 田 安 藝 佐 伯 山 縣 高 宮 加 茂 豐 田		

裁 訴 控 屋 古 名																			
安 濃 津										岡 崎					松 山 和 宇 島 宇 和 島 愛 媛 縣				
山 田 山 田										岡 崎 豐 橋					高 松 九 龜 大 洲 西 條				
岐 阜										上 野 三 重 縣					熱 田 一 宮 愛 知 縣				
伊 勢 伊 賀 全 國 四 郡										尾 張 知 多 愛 知 內					伊 豫 喜 多 西 宇 和				
河 出 鈴 鹿 菟 野 安 濃 飯 高 一 志 飯 野										丹 羽 葉 栗 中 島					宇 摩 新 居 周 布 桑 村 越 智				
菜 名 員 部 朝 明 三 重										額 田 碧 海 幡 豆 西 東 加 茂					北 東 南 字 和				
紀 伊 (南 北) 牟 婁										三 河					大 內 寒 川 三 木 山 田 香 川 小 豆				
厚 見 羽 栗 各 務 中 島 方 縣 山 縣 武 儀 郡 上										八 名 北 南 設 樂 寶 飯 渥 美					那 珂 多 度 三 野 豐 田 鵜 足 阿 野 內				

所 判 裁												
鹿兒島			熊 本					大 分				
宮崎			天草					中津				
延岡	都城	宮崎	大島	水引	鹿兒島	天草	八代	山鹿	熊本	豆田	中津	杵築
鹿兒島縣			熊本縣					大分縣				
日向			大隅		薩摩	肥後					豊前	豊後
白杵	諸縣ノ内		大隅	薩摩	薩摩	天草	求麻	八代	山鹿	熊本	下益城	西國東
	宮崎		薩摩	薩摩	薩摩	天草	求麻	八代	山鹿	熊本	下益城	西國東
	宮崎		薩摩	薩摩	薩摩	天草	求麻	八代	山鹿	熊本	下益城	西國東
	宮崎		薩摩	薩摩	薩摩	天草	求麻	八代	山鹿	熊本	下益城	西國東
	宮崎		薩摩	薩摩	薩摩	天草	求麻	八代	山鹿	熊本	下益城	西國東

訴 控 崎 長														
鳥取			長崎				福 岡				對馬			
米子			佐賀				筑前				對馬			
鳥取	米子	米子	長崎	島原	平戶	福岡	久留米	久留米	小倉	小倉	筑前	筑前	筑前	對馬
鳥取縣			長崎縣				福岡縣				對馬縣			
伯耆			肥前				筑前				對馬			
汗入			南高來				筑前				對馬			
會見			南高來				筑前				對馬			
八橋			南高來				筑前				對馬			
日野			南高來				筑前				對馬			

判 所			函 館		控 訴	
盛岡			秋田		函館	
磐井			八戸		八戸	
宮古	北中	羽後	陸奥	五所河原	函館	江刺
陸中	陸奥	秋田	青森	弘前	江刺	福山
陸前	陸奥	秋田	青森	弘前	江刺	福山
仙臺			宮古		函館	
陸前			陸奥		函館	
陸前			陸奥		函館	
陸前			陸奥		函館	
陸前			陸奥		函館	
陸前			陸奥		函館	
陸前			陸奥		函館	

裁 訴 控			城 宮		仙 臺	
山 形			福 島		宮 城	
酒田			若松		大石	
米澤			平		古川	
新庄			中		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	
山形			福		仙臺	

院		裁		判		所	
札幌		札幌		札幌		札幌	
札幌	浦川	増毛	小樽	岩内	根室	根室	厚岸
石狩	十勝	天鹽	北見	後志	根室	根室	根室
札幌區 全國九郡	釧路 全國七郡	宗谷 全國六郡	小樽 余市 利尻 禮文	古宇 岩内	千島 全國五郡	北見 全國八郡	釧路 全國七郡
釧路 全國七郡	宮呂 紋別	宮呂 紋別	宮呂 紋別	宮呂 紋別	宮呂 紋別	宮呂 紋別	宮呂 紋別

○十六年六月第二十號布告

明治十六年(月)第二號布告裁判所一覽表中左ノ通増補改正ス但新置裁判所開廳及實施ノ期日ハ司法卿ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

一富山佐賀宮崎ノ三支廳ヲ各本廳ト爲シ其ノ管轄ハ從前支廳ノ管轄ニ同シ

左ノ始審裁判所ニ支廳ヲ置キ其管轄ハ各該地治安裁判所ノ管轄ニ同シ
千葉始審裁判所管内 木更津

第四編訴訟法

第一類裁判所 各裁判所位地及管轄區畫

和歌山始審裁判所管内	田邊
岐阜始審裁判所管内	高山
山口始審裁判所管内	赤間關
長崎始審裁判所管内	平戶 一福江
鹿兒島始審裁判所管内	大島
仙臺始審裁判所管内	石卷
秋田始審裁判所管内	大曲
浦和始審裁判所管内川越ニ治安裁判所ヲ置キ武藏國入間高麗ノ兩郡ヲ管轄ス	
神戸始審裁判所管内龍野ニ治安裁判所ヲ置キ播磨國揖西揖東赤穂佐用宍粟ノ五郡ヲ管轄ス	
長崎始審裁判所平戸支廳管内武生水ニ治安裁判所ヲ置キ壹岐國一圓ヲ管轄ス	
福岡始審裁判所久留米支廳管内柳川ニ治安裁判所ヲ置キ筑後國三池山門ノ兩郡ヲ管轄ス	

熊本始審裁判所管内牧ニ治安裁判所ヲ置キ肥後國阿蘇郡ヲ管轄ス
 秋田始審裁判所管内大館町ニ治安裁判所ヲ置キ羽後國北秋田郡及ヒ
 陸中國鹿角郡ヲ管轄ス
 弘前始審裁判所管内終ヶ澤ニ治安裁判所ヲ置キ陸奥國西津輕郡ヲ管
 轄ス
 水戸始審裁判所土浦支廳管轄中筑波トアルヲ筑波ノ内ト改メ同下妻
 支廳管轄ヘ「筑波ノ内」ノ四字ヲ加フ
 京都始審裁判所管内福知山治安裁判所ヲ同宮津支廳ノ管内ニ改メ
 金澤始審裁判所管内金澤治安裁判所ノ管轄タル越中ノ國礪波郡ヲ富
 山始審裁判所ノ管内高岡治安裁判所ノ管轄ニ改ム
 鹿兒島始審裁判所管内鹿兒島治安裁判所管轄ニ「日向南諸郡」ノ五字
 ヲ加ヘ宮崎始審裁判所管内宮崎治安裁判所及ヒ都城治安裁判所管轄
 中諸縣ノ内トアルヲ各「北諸縣ノ内」ト改ム
 ○十七年十月第二十七號布告
 明治十六年一第貳號布告裁判所一覽表中左ノ通増補改正ス但新置裁

判所開應ノ期日ハ司法卿ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

一山形始審裁判所酒田支廳管内鶴岡ニ治安裁判所ヲ置キ羽前國東田
 川西田川兩郡ヲ管轄ス

一秋田始審裁判所大曲支廳管内横手ニ治安裁判所ヲ置キ羽後國雄勝
 郡及ヒ平鹿郡ノ内ヲ管轄ス

一千葉始審裁判所木更津支廳管内北條ニ治安裁判所ヲ置キ安房全國
 ヲ管轄ス

一福岡始審裁判所久留米支廳管内久留米治安裁判所管轄郡名中全國
 十郡トアルヲ三潞ノ内上妻下妻生葉竹野山本御原御井ノ十八字ニ
 改メ同柳川治安裁判所管轄中(三潞ノ内)ノ四字ヲ加フ

一秋田始審裁判所大曲支廳管内大曲治安裁判所管轄郡名中平鹿ノ下
 (ノ内)ノ二字ヲ加フ

一宮崎始審裁判所管内宮崎治安裁判所管轄郡名中北諸縣ノ内トアル
 ヲ(東諸縣)ト改メ那珂ノ内トアルヲ(北那珂南那珂ノ内)ト改メ同
 管内都城治安裁判所管轄郡名中北諸縣ノ内トアルヲ(北諸縣)ト改

マ那珂ノ内トアルヲ(南那珂ノ内)ト改メ更ニ(西諸縣)ノ三字ヲ加
ベ同管内延岡治安裁判所管轄郡名中白杵トアルヲ(西)白杵ト改ム

第二節 北海道及沖繩縣ノ裁判并控訴ノ管轄

○十四年十二月第七十九號布告
各裁判所ノ位置及管轄區畫ノ儀本年十月第五十三號ヲ以テ布告候處北
海道(函館始審裁判所管内ヲ除ク)并ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ
裁判シ治罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ

但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ
管轄ニ屬ス

第三節 小笠原島裁判事務

○十四年十月第五十六號布告
小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所(即テ該島所)始審裁判
所(即テ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ)民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴
裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

○司法省
茨城縣ヨリ
勸解ノ儀ニ
付同
明治十四年
三月第一條
治安裁判所
三件ハ勸解
治安個ハ是
レ安裁判所
治安裁判所
ヲ定メテハ
對ニシテハ
對スルハ勸
ラサレハ勸
ホ從前ノ通
治九

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

第三節ノ二 伊豆七島裁判事務

○十四年十月第五十七號布告
伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違
警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ
管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

第二款 裁判所權限

第一節 治安及始審裁判所

○十四年十二月第八十三號布告
第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ
商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニアラス
第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付キ始
審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノヲ裁判

第四編 訴訟法 第一類 裁判所 治安及始審裁判所

年御省甲第十七號
 論達ニ意ハハハハ
 經ルトシテ中ニハハ
 訟者ノ意ハハハハ
 モノニシテモモモモ
 カノ効ナシトモモモ
 底其効ナシトモモモ
 ヲ起スノハ直ヨリ不
 若筋ト相心固ヨリ不
 哉又其相心固ヨリ不
 應二對スル事件(官
 署ハ勸解スル限中
 廳ガ人ト有之官
 モ人カニ對スル
 スルモ民カニ對
 ハアルモ民カニ對
 七年第二十四號
 省及布達八年甲
 五號十四年甲第
 號御布達八年甲
 考御省布達八年
 官廳字面ノ通人モ

スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ビ價額百圓以上並ニ第三條ニ揭ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九條布告控訴手續ニ照準スヘシ

○十四年八月司法省第八號布達

從來人民ヨリ郡區長及戶長ノ職務上ニ對スル詞訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨布達候事

但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來候振合ニ可進候事

第一節ノ二 身代限分配加入ノ訴ニ關ス

ル裁判所權限

○十六年三月司法省第十二號達

民ニ止マリ官廳カ人
 合蓄セサル儀ト相
 心得可然哉
 明治十六年十月二十三日
 指令
 同ノ趣前段人民
 相ノ趣前段人民
 訴訟ハ商事ニ係
 リ急速ヲ要スル
 事ト速ク除外
 必ス勸解ヲ可外
 キモノト官廳ニ
 人モト官廳ニ
 對スル官廳ニ
 リ人民ト官廳ニ
 ニ拘テ其係ト
 ハ總テ勸解セサ
 ルモトサ
 明治十六年十一月十日
 ○司法省
 岩手縣ヨリ町村
 立小學校學資金
 ニ係ル訴訟之儀
 付伺

身代限分配加入訴ノ義ニ付別紙ノ通長野治安裁判所伺ニ對シ及指令候條爲心得此旨相達候事

但該指令ニ抵觸スル從前ノ指令内訓ハ自今消滅シタル義ト心得ヘシ

長野治安裁判所伺(明治十六年二月十七日)

治安裁判所ニ於テ金額百圓未滿ノ訴件身代限處分中金額百圓以上ノ債主其分配加入ヲ始審裁判所ヘ出訴シ其權義確定セシ后該件ヲ受付シ來ルヲ以治安裁判所ハ之ヲ併セ其處分ヲ爲ス右治安裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケタル原被告ハ他ノ債主ヨリ始審裁判所ヘ金額百圓以上ノ訴ヲ爲セシヨリ得サル以前ニ在テハ(始審裁判所ヨリ金額百圓以上ノ訴件ヲ受付サル、カ又ハ原被告ヨリ他ニ分配加入ノ事件アルトノ申述ヲ聽クニ非レハ)他ニ分配加入ノ訴ノ之レナキ者トナシ期ニ至リ分配處分濟ノ後始審廳ヨリ該件ノ到達スル如トキハ多少官民ノ手數錯雜スルノミナラズ隨テ費用ヲ要ス前額ノ場合金額百圓未滿ノ訴件治安裁判所ニ於テ身代限處分中同負債者ヘ掛リ其分

官廳ヨリ人民ニ對シテハ
 對シテハ人民ヨリ官廳ニ對シテハ
 總テハ勸解ヲ須ヒシテ
 直ニ本訴ヲ起シテ處分
 ル儀ニ有之候處金
 ニ付立小學償
 ヲ付シ其辨償
 怠ガ主者アルニ
 之ガ主者アルニ
 委員ニ於テ出訴セ
 ントスル者アリ
 學務委員ハ素ヨリ
 官等アルハ非ズ
 共事務所ハ官廳ト
 云フ能ハズト雖モ
 其資金ハ學區ノ
 互ニシテ之ヲ同
 スルヲ得ザルモ
 ト被考候ニ付右
 ハ無論官廳ヨリ
 民ニ對スル訴訟
 稜相心得可然哉
 明治十七年三月十日

配加入ノ訴ヲ爲サント欲スル者ハ其處分ヲナス治安裁判所へ直ニ出
 訴セシメ其治安裁判所ハ該分配事件ニ限り金額百圓以上ト雖モ都テ
 之ヲ受理シ判決ヲ與フヘキハ之ヲ與ヘ而シテ該裁判權ハ始審裁判所ニ
 於テ裁判セシモノト同一トナシ其裁判不服ナルモハ直ニ上等ナル控
 訴裁判所へ控訴スル權ヲ有セシメナハ實際便益不少ノミナラス明治
 十四年第八十三號御布告ノ權限ニモ敢テ抵觸セサル儀ト被考候條治
 安裁判所ニ於テハ身代限分配加入ノ訴ニ限り金額百圓以上ト雖モ受
 理審判致不苦哉此段相伺候至急何分ノ御指令奉仰候也
 指令(明治十六年三月五日)
 伺ノ趣身代限分配加入ノ件ハ金額ノ多寡ニ拘ハラヌ明治十七年第七十
 一號布告掲示案ノ旨趣ニ依リ身代限ノ處分ヲ爲シタル裁判所ニ於テ
 之ヲ受理スベク若シ其事件裁判ヲ要スルニ至ルモハ明治十四年第八
 十三號布告ノ權限ニ照ラシ之ヲ管轄裁判所ニ送附シ其裁判ヲ受ケシ
 メタル上身代限ヲ爲シタル裁判所ニテ分配ヲ爲スヘキモノトス

第二節 控訴裁判所

指令
 伺ノ趣キハ勸解
 ヲ經ベキモノト
 明治十七年三月廿七日
 ○司法省
 三重縣ヨリ協
 費不納ニ付戶
 ヲリ人民ニ對
 ル事件ニ付伺
 報ヨリ協費不
 長ヨリ協費不
 納ハ十四年第
 三號布告第一
 但テ之限外ナ
 以テ勿論勸解
 指令電報
 協費不納ニ付
 戶長ヨリ人民
 對スル事件伺
 趣キハ勸解ヲ
 可キ者ニアラ
 明治十七年五月八日

○十年二月第十九號布告拔抄
 第一條 上等裁判所ハ地方裁判所ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ
 覆審ス
 ○八年五月司法省甲第五號達
 各人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理
 候條此旨布達候事
 ○八年十一月司法省甲第十四號達
 各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟受理ノ儀ニ付本年甲第五號ヲ
 以テ及布達置候處自今各人民ヨリ開招使ニ對スル訴訟ハ東京上等裁
 判所ニ於テ受理候條此旨布達候事
 第三節 大審院
 ○十年二月第十九號布告拔抄
 第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ不法ナル
 者ヲ破毀シテ法憲ノ一統ヲ主持スル所トス
 第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ

第四編訴訟法 第一類裁判所 控訴裁判所并大審院

○司法省ヨリ郡區
 長等殘務ニ關ス
 郡區長戶長殘務ニ關
 所屬民事訴訟ニ付
 能ハテ代理セシムル
 等ハザル節ハモ不苦
 哉ニ屬スルモ不苦
 指令

明治十七年二月廿八日
 郡區長戶長殘務
 二關スル民事訴訟
 訟ニ付伺之趣キ
 ハ代言人ニ代言
 フ委任スルモ不
 苦候
 明治十七年三月三日

判決セシム又便宜ニ依リ大審院自ラ之ヲ判決スル事ヲ得

第三條 己ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又
 大審院ノ旨ニ循ハサル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四條 海陸軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之
 ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條

第六條 内外交渉民事事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

○第二章 裁判

第一節 裁判事務心得

○八年六月第百三號布告

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ疑難
 アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等裁判所ニ伺出ルヲ得ス
 但刑事死罪終身懲役ハ此例ニ非ラス

第二條 凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アルハ其裁判所ニテ辨解
 ヲ爲スヘカラス定期ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキ事ヲ言

渡ス可

第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモ
 ノハ條理ヲ推考シテ裁判ス可シ

第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ定規
 トスルヲ得ス

第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ
 將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス

第二節 證據物

○七年七月第十四號司法省達

聽訟上原被告ヨリ差出ス處ノ證據物ハ其裁判官見認メ有無且取捨ノ
 振台ニ因リ後來ノ裁判ニモ差響ク筋ニ付今後出訴ノ者之レアル時ハ
 事件採用不採用ヲ論セス其差出ス處ノ證據物本紙ニハ總テ年號月日
 番號ト判事誰或ハ見認メタルヲ記載シ押印可致此旨相達候事

○十三年十一月二十五號司法省達

本年當省丁第八號達左ノ通改正候條此旨相達候事

明治七年第十四號ヲ以テ聽訟上原告ヨリ差出ス所ノ証據物云々相達置候處公債証書地券等ハ記名捺印スヘキ義ニ無之候條此旨爲心得相達候事

○十四年六月丁第七號司法省達

裁判上諸役所之帳簿入用ノ節ハ可成必用之分ヲ寫取候儀ト相心得右寫本ニ正寫之証トシテ各役所之印ヲ捺シ差出シ候様照會シ紙丁多數ヲ要スルルハ其費用仕拂可申事

但可成寫本ニテ可取計等ニ候ヘテ裁判事件ニ依リ元帳ヲ要スル節ハ取寄方照會可致尤遠隔之地ニテ運送不便ナルルハ其地最寄之裁判所ヘ右取寄方及調方共依頼可致事

第三節

院省使府縣ニ對スル訴訟假

規則

○七年九月第二十四號司法省達

第一條 凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法省ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ

但圖區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做スヘシ

- 一 院省使府縣所有ノ土地ニ關シタル事
- 一 院省使府縣ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事
- 一 官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル院省使府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ニ差出スヲ得ヘシ

其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サ、ルヲ得サルルハ其本人ヲ呼出スコトモアルヘシ
但委任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處ス

第三條 裁判上院省使府縣ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルルハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟ス可シ
若シ主務ノ官吏一巳ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還ス可キハ具狀申稟スルニ及ハスト雖モ事情止ヲ得サル場合ニテ院省使府縣ヨリ償還セサルコトヲ得サルルハ具狀申稟スルコト前項ニ同シ

○司法省新濶縣ヨリ人民
 長ヨリ係ル縣令及ヒ郡
 付長ヨリ係ル縣令及ヒ
 民ヨリ係ル縣令及ヒ
 郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 並ニ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 ナシ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 兼テ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 指 兼テ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ

明治十七年五月五日
 令電報
 五月五日
 民ヨリ係ル縣令及ヒ
 人ヨリ係ル縣令及ヒ
 人ヨリ係ル縣令及ヒ
 ナシ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 ナシ郡官ヨリ係ル縣令及ヒ
 立テ答辨ヲ爲別
 明治十七年五月八日

第四編訴訟法

第一類裁判所

院省使府縣ニ對スル訴訟假規則

但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ始審トシ更ニ控告スルコトヲ得ス

第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ皈スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルハ先以テ之ヲ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フヘシ

- 一官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一道路ヲ作ルコトニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事
- 一行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

第三節ノ二 宗教上ニ關スル訴訟

○十三年十一月一日司法省伺定

別紙熊本裁判所長寺島判事ヨリ宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀伺出

候處右ハ元來司法裁判所ニ於テ受理スヘキ件ニ無之儀ト存候得共目今ニ在リテハ尋常民事ノ詞訟同様該裁判所ニ付シ審判爲致可然歟何分ノ御裁令ヲ仰キ度訴答書類相添ヘ此段相伺候也

明治十三年八月廿日

司法卿田中不二啓

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ趣ハ受理裁判スヘキ者ニ非ラス

明治十三年十一月一日

別紙

宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀ニ付伺

明治十一年內務省第五十七號達ニ依リ廢寺再興願ノ儀ニ付信徒共ヨリ宗教取締リニ對シ本山管長ヘ差出テ添翰願書ノ取次ヲ要メタリシカ其願書取次吳レサルトテ信徒共ニ於テ取締ヲ被告ト爲シ本山添翰拒一件ノ目安ヲ掲ケ訴出候然ルニ右一件ハ宗教取締ノ職掌ニ關カリ候得共既ニ僧徒ノ儀ハ明治七年第八號ヲ以テ一般ノ職分同様ニ可心

得云々ノ公布有之ノミナラス宗教上ニ關スル訴訟事件ノ取扱方別段ノ御規則モ無之上ハ尋常民事ノ訴訟同様受理裁判致シ不苦哉否伺上候條尤モ差掛リ候事件有之ニ付至急何分ノ御指揮有之度候也

熊本裁判所長

明治十三年五月廿六日

判事 寺島直

田中司法卿殿

第四節

裁判所取締規則

○七年五月司法省甲第九號達

第一條 訴訟ハ訴訟口詰必ス出席シ詞訟人ヲ順次ニ呼込ニ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ紛鬧ノヲアラサル様其取締ヲ爲スヘキ事
第二條 原被告人ヲ初メ代言人等總テ訴訟ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ從ヒ沈黙整列シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲ爲スヘシ
第三條 原被告等共其事情ヲ餘蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレハ更ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條 凡ソ進退動作ハ輕躁ニ涉ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラス諄々トシテ其事件ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スヘシ
第五條 (明治七年十月八日司法省甲第十九號達ヲ以テ左ノ通り改正ス第六條以下モ亦同シ)

前條ニ記載シタルコトヲ守ラズ裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク者アルハ裁判官直チニ譴責ヲ加フヘシ

第六條 譴責ヲ加フヘキモノアルハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條 裁判官ヲ罵ルモノアルハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科スヘキ事

第八條 裁判ノ時公聽ヲ許サレタル者ハ人々皆沈黙敬聽スヘシ但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛鬧ニシテ審問ノ妨礙アリト思量スルハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

第二類 代言人代人

○第一章 代言人

○第一款

第一節 代言人規則

○十三年五月司法省甲第一號布達

明治九年當省甲第一號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事

但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タルヘシ

第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試験ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲ヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
- 二 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
- 三 盜罪詐僞罪ニ付キ刑ヲ受ケタル者

○司法省
長崎縣ヨリ詞訟
上代人ノ儀ニ付
本年第一號布達
以テ詞訟代人規
改正相成候ニ付
ハ從前ノ通代人
於區戶長公証ス
得共爲念此段相
候也

明治十七年三月廿六日
指令
明治十七年四月十四日
同ノ通

○司法省
福岡縣ヨリ詞訟
代人ノ儀ニ付
電報ノ人裁判所
出願ノ節戶長及
區長ノ公証ニ及
ザルモ戶長ノ與
ヨ要ス可キ哉

明治十七年五月十日
指令
明治十七年五月十五日
同ノ通

四 國事犯ヲ除クノ外懲役並ニ禁獄一年以上ノ刑ヲ受ケタル者

五 官更准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ

入リテ其規則ヲ守ルヘシ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スルハ其地

組合ノ規則ヲ遵守スヘシ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル

ルハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事(檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者以下之レニ倣フ)并ニ議

員長ヘ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納スヘシ

第七條 代言免許ハ滿一年(月ヲ以テ算フ)ヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス

其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル

免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖用之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受クル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納

ムヘシ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ

差出ス可シ但シ手續ヲ爲シタルルハ期限後ニ至リ未タ免狀ノ下付

有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得ヘシ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ヌ又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フヘシ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出スヘシ但願書ノ副本ニ檢事ノ捺印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代言人タルノ証ト爲スヘシ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受クヘシ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分スヘシ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄每一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クスヘシ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ因リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ合スルコトアル可シ

一 互ニ風議ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ムヘシ若シ投票ノ數相均シキハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキハ長年ノ者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アルトキハ之カ代理ヲ爲スヘシ其任期ハ各滿一年トス但每期投票

多數ヲ得ルモノト雖其職務繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アルハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發スヘシ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ルハ各代言人ヨリ直チニ檢事ニ告發スヘシ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスルハ必ス檢事ノ認可ヲ受クヘシ但其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者トス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉任廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ
第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツヘシ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖其代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯スルハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ

第二十四條ニ依テ懲罰スヘシ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹譏スル者
 - 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
 - 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
 - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
 - 五 證據ト爲ルヘキ者ヲ捏造シタル者
 - 六 他人ノ詞訟ヲ買取り自己ノ利ヲ圖ル者
 - 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
 - 八 故ヲニ時日ヲ遷延シ詞訟本人并ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
 - 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
 - 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ

- 一 譴責
- 二 停業
- 三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコアルヘシ

第二十五條 譴責ハ止メ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ラサレハ復テ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之レヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ掲示スヘシ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作リ現住戸長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受クヘシ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律
- 三 訴訟ノ手續
- 四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書式

代言願

本貫住所(寄留ナルキハ其寄留ヲ記入ス可シ)

身分

氏

年

齡

名

代言營業仕度ニ付御試験ノ上免許被成下度此段奉願候也

右

年號月日

氏名印

司法卿某殿

前書ノ通出願候ニ付奥印致候也

右戸長(又ハ區長)

氏名印

履歷書

本貫住所(寄留ナルハ其寄留所ヲ記ス可シ)

身分

職業

氏名

年齢

一 地名身分何某ニ隨ヒ何年ヨリ何年迄何學修行何某ニ隨ヒ何技術ヲ修行

一 何年月日何(職官)任シ何年月日(免官)辭職

二 何年月日何々ノ廉ヲ以テ何應ヨリ賞典ヲ受ク

一 何年月日何々ノ犯罪ニ依リ何ノ刑ヲ受ク

一 何年月日身代限ノ處分ヲ受ケ何年月日辨償ノ義務ヲ終フ

右ノ通ニ御坐候也

年號月日

代言引續願(免許狀紛失氏名改換ノ時ノ願書モ此式ニ倣フ可シ)

引續代言營業仕度候ニ付免許狀御下付被下度此段奉願候也

本貫住居(寄留ナルハ其寄留所ヲ記スヘシ)

免許代人

年號月日

氏名印

司法卿某殿

第二節 所屬代言人規則

○十四年十二月司法省甲第八號布達

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所々在ノ

地ニ住居スル免許代言人ヲ云フ

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辨護人ハ正當ノ事由

ヲ証明スルニアラサレハ之ヲ辭スルコト得ス

第三條 代言又ハ辯護受任中ハ代言免許満期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ルマテ其代言辯護ヲ擔當スヘシ

第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以其任ヲ闕クコト得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代言人辯護人ヲ選任シタル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當スヘシ

總テ謝金ニ付テハ出訴スルコトヲ許サス

○第二款

第一節

法律學卒業者

○十三年十一月司法省丙第十六號達

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得候事
文部省所轄東京大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者代言營業出願セシ
ルハ明治十三年五月司法省甲第一號布達改正代言人規則第二十七條
(出願)第二十八條(試験)ニ關セテ免許狀授與候條右出願ノ節ハ卒業免
狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨相達候事

但本文試験ニ關スルモノ、外代言人規則ニ準據スルハ一般代
言人ト異ナルコトナシ

○第二章 代人

第一節 代人規則

○六年六月第二百五號布告

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則
別紙ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理
セシムルノ權アル可シ

但本人幼年者ニテ其事理ヲ辨シ難キルハ其後見人及ヒ親族ノ者
協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事
件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係メ
ルヘシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ム可シ

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其代人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ルモノトス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スルトキハ必ラス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ

第七條 委任狀書式左之通

拙者共儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀仍テ如件

住所身分

年號何年何月何日

姓 名 印

(後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記ス可シ)

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布ス可シ

第二節 詞訟勸解代人

○十七年一月第一號布達

明治十三年(五月)司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付キ己ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ選ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受クヘシ但シ代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコアルヘシ

第三類 勸解出訴

○第一章 勸解

第一節 勸解

○九年十一月司法省甲第十七號達

民事ノ詞訟ハ可成丈ケ一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可ク此旨諭達候事

第二節 本人罷出

○八年十月九日司法省番外達

勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直チニ聞取ルニアラサレハ事情ヲ盡シ難キ儀ニ付本人ニテ可能出候條此旨布達候事

但本人病氣等不得已事故アルルハ親類ノ内ヲ以テ代人トシテ差出可申事

第三節 歎願及再審願

○十四年三月司法省甲第三號布達

刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省ヘ對シ歎願或ハ再審願ト唱ヘ書面差出候者往々有之候處右ハ固ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指令ニ及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

第二章 出訴

第一欸 出訴期限

第一節 出訴期限規則

○十六年十一月第三百六十二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタルルハ早速裁判所ヘ出訴致シ不苦候處延期ノ勸解ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴致シ候トモ又ハ勸解ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勸解中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候ルハ貸方借方諸人証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定メ候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

第一條

- 一 學藝ノ授業料
 - 一 旅籠料
 - 一 運送賃
 - 一 飲食料
 - 一 手付金
 - 一 商人互ノ賣掛金
 - 一 職人ノ手間代金
 - 一 日雇人ノ給料
 - 一 請負金
 - 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
 - 一 男女藝者ノ揚代金
- 右ハ六ヶ月限
- 第二條
- 一 醫師ノ脉診及ヒ藥料
 - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料

- 一 商人ヨリ商人ニ非ラサル者ヘノ賣掛代金
 - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限
- 第三條
- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
 - 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
 - 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
 - 一 小作米金
 - 一 証據金
 - 一 敷金
 - 一 物品ノ借賃又ハ損料
 - 一 養育料
 - 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
 - 一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金
- 右ハ五ヶ年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ以テ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做ス可シ又從前結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌月ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事
但シ明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

第二節 預金穀

○十年一月第十二號布告

預ケ金穀ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラヌ受理スヘキ成規ニ候處

自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

○七年三月第二十七號布告

預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月二日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判可致候條此旨布告候事

第二節ノ二 裁判執行

○十一年三月司法省丁第九號達

裁判所執行ノ出訴期限ニ付高知裁判所ヨリ甲號ノ通り伺出ニ因リ乙號ノ通太政官ヘ伺候處伺ノ通ト御裁令有之ニ付丙號ノ通指令候條爲心得相達候事

甲號 高知裁判所長判事石井忠恭伺(十一年一月十二日)

明治八年四月廿五日滋賀縣伺ノ御指令ヲ玩味スルニ主タル訴件ニ附帶シ訴訟入費曲者ヨリ直者ヘ償却可致旨裁判言渡ノ後直者ヨリ滿六ヶ月ヲ經過シテ其償却ヲ請求スルルハ出訴期限第一條ニ據リ直者ニ於テハ要償權利ヲ失シ曲者ニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得ルニ

至ル然ルニ主タル訴件ニ限リ權利者ニ於テ在昔數年ノ久ヨリ經過ス
ルモ裁判執行ヲ請求スルヲ得ルハ允當ナラサル様被相考等シク是
レ直者ノ曲者ニ於ケル如ク本案ニ關スル(發付代金)等ノ訴件モ初審又
ハ終審裁判言渡當日ヨリ起算シ夫々該訴ノ種類ニ應シ出訴期限ノ
約條ヲ經過シテ權利者ヨリ裁判執行ヲ請求スルハ權利者ニ於テ
ハ裁判權利ヲ拋棄シ義務者ニ於テハ其義務ヲ免レタルモノト看做
シ裁判執行ノ請求狀及却下可然哉至急御指令ヲ仰キ候也

乙號 太政官へ上申(十一年二月八日)

別紙高知裁判所伺ソ趣ヲ審思スルニ裁判言渡ノ後更ニ執行ヲ請求
セス在昔歲月ヲ經過スル者ハ固ヨリ期滿得免ノ效ヲ得ヘシ何トナ
レハ裁判言渡ニ因リ裁判ヲ執行スルノ權義ヲ生セシムルヲ以テ其
權義ニ付必ス期滿得免ノ効アラサルヘカラサレハナリ抑モ斯ノ期
滿得免ハ訴訟原案ノ種類ニヨリ期滿得免ノ長短ニ拘ハラサル可シ
蓋シ裁判言渡ナル者ハ雙方ノ間ニ更ニ裁判上ノ契約ヲ生セシムル
ノ理アルヲ以テナリ我國現行ノ出訴期限(六年第三百六十號布告)ヲ視ルニ裁

判執行ノ出訴期限ニ於テハ明文アルコナシ而シテ其最モ長キ者五
年ナリトス因テハ該伺ノ如キ訴訟原案ノ種類ニ拘ハラヌ滿五年ヲ
以テ期限トナスコ允當ト思考スルニ因リ左ノ通指令可及ト存候得
共明文ナキヲ以テ此段申稟候也

丙號 指令

伺ノ趣裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年
タルヘシ

○明治十八年七月内務省第貳拾六號達

民事上裁判執行ヲ遂ケサル者アルハ權利者ヨリ執行命令書ノ下付ヲ
請求スル場合ニ於テハ裁判所ハ嚮ニ權利者ニ下付シタル裁判言渡書
寫ノ末尾ニ左式ノ如キ命令書ヲ添付シ契印ヲ捺シ下付スヘキ等ニ付
權利者ニ於テ之ヲ提供シ義務者所轄ノ警察署ニ願出ルルハ警察官ニ
於テ別ニ裁判所ノ照會ヲ須メス直ニ義務者ヲシテ該裁判ノ通執行セ
シメ候様可致此旨相達候事

執行命令書

當裁判所ハ誰某ヨリ誰某ニ對スル何々事件ニ付大審院（某控訴裁判所）（某始審裁判所）（當裁判所）ノ與ヘタル此裁判ノ執行ヲ命令スル者也

明治年月日

第二節ノ三 勸解中出訴期限満期ノ者

○九年四月司法省第四十四號達

區裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期ノ者處置方左ノ通り可相心得此旨相達候事

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸解不調ノ翌日ヨリ滿三十日マテハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ

第二條 勸解調ハサルトキ右滿三十日迄ニ府縣裁判所へ出訴ヲ爲サ、ルニ於テハ其ノ事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看做スヘシ

第三節 課税ニ關スル出訴

○十五年五月第二十二號布告

課税ニ關スル處分ニ就キ不服アリテ出訴セントスル者ハ先ツ其旨ヲ申立課額ヲ上納シ領收証書ヲ添ヘ其翌日ヨリ六十日內ニ訴出ツヘシ但納税期限前ニ訴出テ訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課税ヲ上納スヘシ

第三節ノ二 諸費額ニ關スル出訴

○十五年十二月第七十四號布告

備荒儲蓄金及ヒ區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ニ關シ不服アリテ出訴セントスル者ハ都テ明治十五年（五月）第二十二號布告ニ依ルヘシ

○十六年八月第三十一號布告

徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年^{十一月}第七十九號布告ニ依リ處分ス可シ但財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發區ニ没入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス
右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年^{五月}第二十二號布告ニ依ル可シ

○十七年七月第二十三號布告

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年五月第二十二號布告ニ依ルヘシ

○第二款

第一節

負債者失踪後ノ訴訟

○八年一月第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ探上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左之通相定候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定期滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツヘキ事

第二條 債主未ダ負債者ノ失踪ヲ知ラズ定期滿期又ハ出訴期限將ニ尽ントスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀探上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長ヘ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付退テ本人見當ルガ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年(十一月)第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

第二節 代人ニ對スル訴

○十六年六月司法省丁第十八號達

義務ノ証書之某代理某ト代人ノ名ヲ以テ捺印結約シタル者ハ權利者ニ於テ此証書ヲ提供シ出訴スルニハ其本人ヲ相手取ル固ヨリ當然ナリト雖モ便宜ニ隨ヒ記名捺印シタル代人ヲ相手取ルコトアルモ必ス棄却スルヲ要セス他ノ本人又ハ代人ヲ引合人トシテ召喚シ俱ニ之カ答辭ヲ爲サ、メ被告者ノ義務ニ販スルハ被告ヲシテ負擔セシメ引

合人ノ義務ニ販スルニ於テハ引合人ヲシテ負擔セシムル様相當ノ裁判ヲ爲シ與フヘキ筋ニ有之候條豫テ心得モ可有之候得共爲念此旨相達候事

第三節 支廳出訴

○十六年一月司法省甲第二號告示

本年第二號布告ヲ以テ始審裁判所管内ニ支廳ヲ被置候付テハ民事ノ訴訟ハ支廳へ出訴スヘキモノト雖モ被告人ノ承諾ヲ得タル上ハ其承諾書ヲ添へ始審裁判所へ出訴スルコトヲ得
但支廳管内ニアル治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ニ於ケルモ本文ト同シ

○第三款

第一節 訴答文例

○六年七月第二百四十七號布告

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管内ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現任管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取リタル後訴狀ヲ作ルヘシ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書附ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某(府縣)管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類若シ一戸ノ本主ニ非ラヌシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某ノ厄介ト記スヘシ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルモ亦妨ケナシトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フヘシ但此章原告外國人ナルトハ本人名前本國職分及ヒ寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載スヘシ

第二章 代書人ヲ用フル事

第三條

第四條

第五條

(右第二章三ヶ條ハ明治七年七月十四日第七十五號布告ヲ以テ代書人ヲ撰ミ代書セシムルト否トハ本人ノ情願ニ任セラレ訴答文例中之レト抵觸スル麻々ハ總テ廢止セラレタリ)

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作クルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ證據ト爲スヘキ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述フルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名違印スヘシ(附錄一號ヲ見合フ可シ)

但外國人ノ爲メニハ第一章但書ヲ見ルヘシ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコト

能ハサルハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受クヘキ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ルハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載スヘシ若シ八里以内ナルハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ算計ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返済セサル事情ヲ書スヘシ(附錄第二號ヲ見合フ可シ)

田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

但以下十九條迄原告外國人ナルハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明ニ記載スヘシ

但附錄第十八號ヲ見合ヌヘシ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ証印アルコトヲ記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書スヘシ(附錄第三號ヲ見合ヌヘシ)
(四十四號布告ニ因テ消滅ス)賣掛代金云々(此項ハ明治十年第四十四號布告及ヒ司法省丁第二十七號達ニ因リ消滅ス)

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスルルニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取ルヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ違約ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ(附錄第四號ヲ見合ヌヘシ)

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ到リ殘金ヲ受取ルヘキルニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡スヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ違約ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ(附錄第五號ヲ見合ヌヘシ)

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取還サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ
職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀又本條ニ照ラス可シ
奉公又ハ弟子奉公人ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受ケタル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ証印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書スヘシ
諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨ケアルヲ以

テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴フルコトヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ証書確實ナル者ハ之ヲ訴フルコトヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ摸倣ニ付キ各種ノ本條ニ照スヘシ

先キニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルコトアルヲ以テ之ヲ訴ルコトヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スコトヲ得サルノ法ト相抵觸スルコトナカルヘシ(第十三號ヲ見合スベシ)

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場ヘ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離姻ヲ爲スヘキ理由ヲ書スヘシ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母、祖父母アラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印

ヲ爲スヘシ(附録第六號ヲ見合スベシ)

原告人妻ナルモ前條ニ照ラシテ其父母親族等ヨリ訴フヘシ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告クルニ暇ナキハ自ラ訴フルコトヲ得ヘシ

第十六條 養子女離別ノ訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女ト爲シタル年月ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戶籍人別ヲ寫載シ次ニ離別スヘキ原由ヲ書シ原告人親族アラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲スヘシ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照スヘシ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴フルコトヲ得ヘシ養子女ヨリ養父母ヲ相手取りテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被雙方ノ戶籍人別ト讓狀遺狀等ノ証書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續スヘキ條

理ト被告人相續スヘキ條理ナキコトヲ書スヘシ(附録第六號ヲ見合スベシ)

第十八條 田畑山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照スヘシ

田畑山林建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價ヲ受取ラントスル訴狀モ第十條第二項ニ照スヘシ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書スヘシ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱書スヘシ

繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用フヘシ(附録第七號ヲ見合スベシ)

但シ第七條但シ書ヲ見ルヘシ

第二十條 被告ノ訴狀

原被告人豫審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セヌ之ヲ上
等ノ裁判所ニ控訴セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目
ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟廷ニ臨ミタ
ル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得ヘキニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言
渡書ノ寫ト應決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊
ト爲シ訴出ヘシ(但書ハ明治八年第九十三號布告控訴上告手續ニ因テ刪除シ第二
項ハ同年第九十一號布告上告裁判斷所章程第一條ニ因テ刪除ス)

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止マルヘキ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ハラズ訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書
スルニ限ルヘシ又原告人一名ニシテ全時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ
各冊ニ作ルヘシ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スルヲ得ル事

第二十二條 貸借ニ事以上ニシテ原被告人共別人ニ非ラザレハ一冊
ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ヘシ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ証文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ

以テ訴フヘシ若シ債主連名三人ナルヲ一人ニシテ訴フルハ他ノ

二人ヨリ依頼ノ証書ヲ以テ訴フヘシ(附錄第八號ヲ
見合スヘシ)

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄
ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴フルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用証文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀
ハ連名ノ人數ヲ尽ク相手取ルヘシ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者ヌヲハ
連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戶長
某ヨリ承ルト附載スヘシ(附錄第九號ヲ
見合ス可シ)

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於
テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ
任スヘシ

第九章 讓証文ヲ以テ訴フル事

第二十八條 (本條及次條ハ但書ヲ除クノ外明治九年七月六日第九十

九條布告ニ因テ削除セラレタリ第九十九條布告ハ此末尾ニ在リ

第二十九條

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得ヘシ

第十章 代理人ノ事

第三十條

第三十一條

第三十二條

(本章ハ明治九年二月二十日第十八號布告ヲ以テ刪除ス)

第二章 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フヘシ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ルル原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フコトヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ(第四十七條及第四十八條ヲ見合スベシ)

第二 原告人ノ述フル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確証アラハ其

書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書スヘシ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ

末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アルヘシ(附録第十三號ヲ見合スヘシ)

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用フヘシ若シ本人

自署スルコト能ハサルハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第五 答書ハ十六行ニテ一行十五字詰ニ認テ正副二通ヲ具スヘシ

第二章 代書人ヲ用ユル事

第三十四條 (此章ハ明治七年第七十五號布告ヲ以テ刪除ス)

第三章 代理人ノ事

第三十五條

第三十六條

第三十七條

(此章ハ前卷第十章ト同ク削除ス)

第四章 原告人ノ返リ証書ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ証書ヲ還附セサルヲ以テ二重ノ催促ヲ爲ス訴訟ハ被告入共答書ニ返リ証文(返リ証文ハ債主ヨリ原ノ証書ヲ還附セシテ其米金受取ノ証書ヲ交付スルヲ云フ)ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書スヘシ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ証書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確証ノ文字ナク又ハ他ノ證據トスヘキ証跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ証書ヲ以テ返リ証文ト看做スコトヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其証書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本証文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札(對談一札トハ返濟延期ノ証書ヲ云フ)アルコトヲ記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書スヘシ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主

本証文ニ據リ訴出タル原由アルハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ証書ヲ以テ原告人破約ノ証ト爲スコトヲ得ス

第六章 原告人証書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ証書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ証スル爲ニ管轄村ノ役場ニ届ケ置キタル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト証書ノ印ト相違シタル旨ヲ書スヘシ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照スヘシ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ルヘキ米金アリテ其受取ルヘキ期限モ亦過キ未タ訴ヘスト雖モ双方均ク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ニ接續シ差引ノ請算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其

別ニ受取ルヘキ米金ノ証書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書スヘシ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返済スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答フルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返済セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返済ヲ爲スヘキ米金ヲ以テ乙某ニ返済センコトヲ答フルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ラス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十四號
ヲ見合スヘシ)

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借滯滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既済又ハ未済ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ

各種違約ノ訴訟ハ原被双方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ定約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照スヘシ

第十章 對決前返済延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返済スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返済ナルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十五號
ヲ見合ス可シ)

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十六號
ヲ見合スヘシ)

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返済スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其證書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十七號ヲ見合スヘシ)

參看

○九年七月第九十九號布告

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡スルハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之トキ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

第一節ノ二 同附錄

○同上

第一号

訴狀表紙ノ式(美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユヘシ)

年月日

某 訴 狀

住所
身分
氏 名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴フルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ争訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類

訴狀ノ式

住所
身分
原告人 氏 名
住所
身分

某訴

標記云々

被告人 氏 名

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日

氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

某

御裁判所

(明治六年九月第三百十二号布告參看本節末尾ニ在リ)
第二號

貸金催促ノ訴狀

住所

身分

原告人 氏 名

貸金催促ノ訴

住所

身分

被告人 氏 名

一元金何圓 (年月日貸附
年月日期限)

一利金何圓 一年又ハ一月幾分ノ利

合何圓

右証文ノ寫左ノ如シ

借用証文

一金何圓

右云々

借主

氏 名

証人
氏 名

貸主

名當

右原告人氏名申上候云々

住所

身分

氏

名 印

住所

身分

氏

名 印

代書人

某

御裁判所

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

住所

身分

被告人

氏

名

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御座候

但帳面ニ被告入ノ証印有之候

若シ賣掛帳ニアラスシテ証文ナレハ其證文全文ノ寫ヲ
出スヘシ

右原告人氏名申上候云々

年 月 日

氏

名 印

住所

第四編訴訟法

第三類代言人

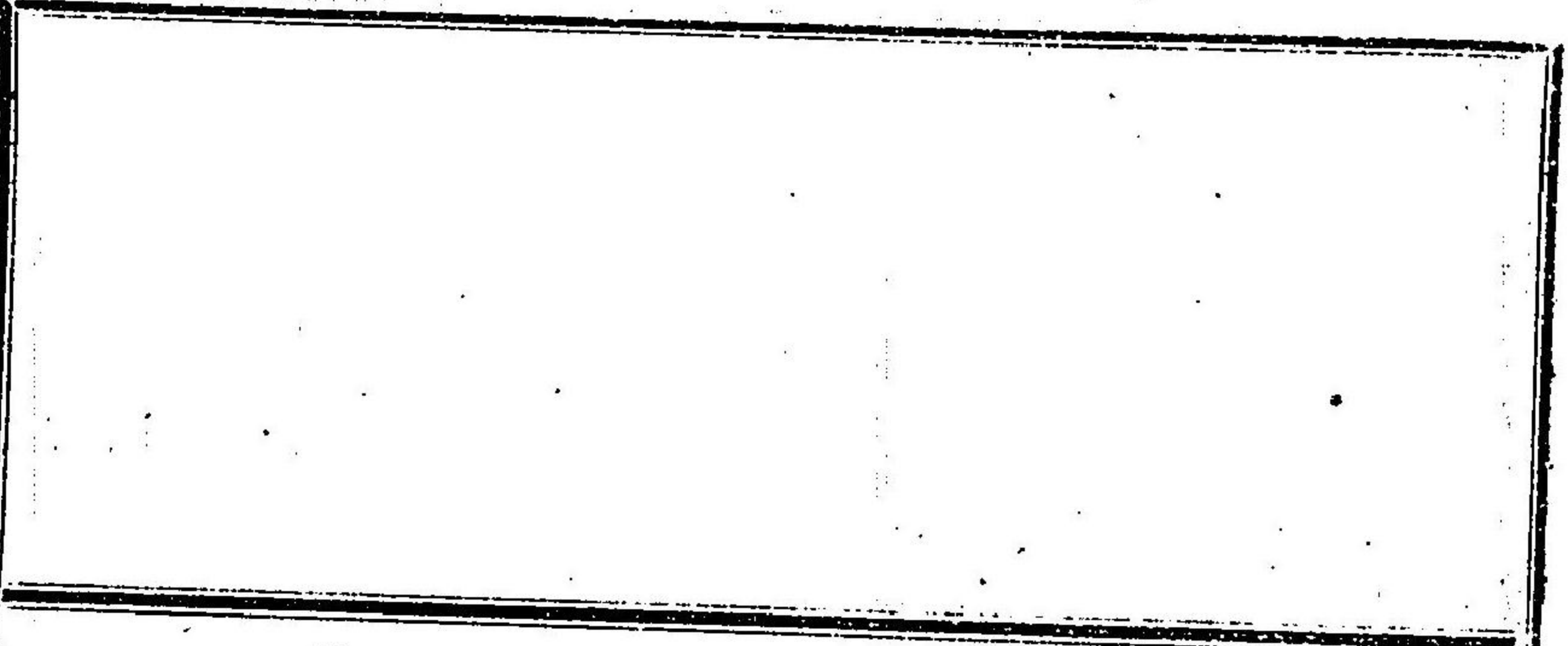
訴答文例附錄

某
御裁判所
代書人 氏 名印
身分

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

原告人 氏 名
住所 身分
買附米引渡違約ノ訴
被告人 氏 名
住所 身分
一米何石 (年月日買取約定濟
此度受取ルヘキ石高)
代金何圓 (一石ニ付
何圓換)



内何圓 年月日手付金トシテ渡濟
殘何圓 年月日限現米引替ニ渡スヘキ約定
右約定証書ノ寫左ノ如シ
証書云々
右原告人氏名申上候云々
年月日

某
御裁判所
代書人 氏 名印
住所 身分

第五號
賣附生糸代金引渡違約ノ訴狀

住所 身分

賣附生糸代金引渡違約ノ訴

原告人 氏 名

住所

身分

被告人 氏 名

一金何圓(年月日限生糸引替ニテ受取ルヘキ殘金高)

元金何圓(年月日生糸何斤賣附約定金高)

但何斤ニ付何圓替

内何圓(年月日手附トシテ受取済)

右約定証ノ寫左ノ如シ

証書云々

右原告人氏名申上候云々

年 月 日

氏 名 印

住所

身分

第六號

某 御裁判所

代書人 氏 名 印

妻離別ノ訴狀

住所

身分

原告人 氏 名

妻離別ノ訴

住所

身分

被告人 氏 名

夫 氏名 當何歲

妻 氏名 當何歲 年月日娶ル

某御役所ニ差出置候年月日ノ戶籍人別帳ノ寫左ノ如シ

人別帳

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏名印

住所

身分

代書人 氏名印

前書申上候處相違無御座候

住所

身分

原告人ノ祖
父母父母等

氏名印

年月日

某

御裁判所

第七號

經界ヲ争フ繪圖ノ式

年月日ノ原圖 何枚ノ一

年月日寫之

住所

身分

原告人 氏名印

原告何村

淺紅色

着色ナシ

争論ノ地

被告何村

黃色

第八號

原告人三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴狀

某ノ訴

原告人

氏

名

住所

身分

被告人

氏

名

身分

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名印

住所

身分

代書人

氏

名印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申等ニ御坐候處病氣云々ニテ
難罷出ニ付何ノ誰ヘ總代相頼候然ル上ハ何ノ誰ヨリ申上候事柄
並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上問敷候爲後証

奥印仕候

住所

身分

年月日

氏

名印

住所

身分

氏

名印

住所

身分

代書人

氏

名印

某

御裁判所

第九號

被告人連名中脱走又ハ病死人アルノ訴狀

住所

某ノ訴

原告人 氏 名 身分

住所

身分

被告人 氏 名

元住所

身分

被告人 氏 名

右何ノ誰ハ年月日脱走致候段

何町役人何ノ誰ヨリ承知仕候

住所

身分

被告人 氏 名

右何ノ誰ハ年月日死亡致候段

何町役人何ノ誰ヨリ承知仕候

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

某

御裁判所

第十號

讓証文ヲ以テ催促スル訴狀（此一號ハ明治九年第九十九號布告
ヲ以テ消滅ス故ニ零ス）

第十一號

代言人ヲ頼ム訴狀

第十二號

一時假リノ代言人ヲ出ス証書

(右兩號ハ明治九年第十八號布告ニ因テ消滅ス故ニ零ス)
第十三號

答書表紙ノ式 (用紙寸法第一號 訴狀ノ法ノ如シ)

年月日

某ノ答書

住所

身分

氏名

答書ノ式

住所

身分

被告人 氏名

某ノ答書

右住所身分何ノ誰何々儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕
御答申上候

私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ

右之通御座候

年月日

氏名印

住所

身分

代書人 氏名印

某

御裁判所

第十四號

對決前熟議解訟ノ答書

住所

身分

被告人 氏名

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見
仕原告人へ熟談濟方仕候趣申上候
私儀云々

年月日

氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

前書被告何ノ誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候ニ付此上對決ノ御
裁斷不奉願候

住所

身分

原告人 氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名 印

年月日

某
御裁判所

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

住所

身分

被告人 氏 名

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見
仕原告人へ熟談ノ上濟方日延約定仕候段左ノ通り御座候

私儀云々

年月日

氏 名 印

住所

身分

代書人 氏 名印
前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上濟方日延約定仕候ニ付來何
年何月何日マテ御裁斷御猶豫奉願候

住所
原告人 氏 名印
身分

住所

代書人 氏 名印
身分

某
御裁判所

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答所

住所
身分

被告人 氏 名

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々之儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見
仕原告人へ熟談ノ上親族朋友 中何ノ誰ヨリ日延代償約定仕候段左ノ
通り御座候

私儀云々

年月日 氏 名印
住所

身分

代書人 氏 名印

前書被告人何ノ誰申上候通り私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段相
違無御座候

住所

身分

代償人 氏 名印

年月日

住所
身分
代書人 氏 名印
前書被告人何ノ誰申上候通私共承諾仕候ニ付此上對決ノ御裁斷
不奉願候

住所

身分

原告人 氏

名印

住所

身分

代書人 氏

名印

某

御裁判所

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

住所
身分
被告人 氏 名
某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答
右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見
仕原告人へ熟談之上親族朋友中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候
段左ノ通御座候

住所
身分
代書人 氏 名印
前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段
和違無御座候

住所
身分
代書人 氏 名印

年月日

住所

身分

被告人 氏

名

某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見

仕原告人へ熟談之上親族朋友中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候

段左ノ通御座候

年月日

氏

名印

住所

身分

代書人 氏

名印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段
和違無御座候

住所

身分

年月日

代償人 氏

名印

住所

身分

代書人 氏

名印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上何ノ誰ヨリ代償濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

住所

身分

原告人 氏

名印

住所

身分

代書人 氏

名印

年月日

某

御裁判所

第十八號

外國原告人ノ訴狀

本國住所

身分

原告人 氏

名

訴狀

住所

身分

被告人 氏

名

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所へ左ノ通訴訟申上候

第一云々

第二云々

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

但シ訴訟ノ根源事實ノ大畧ヲ明白ニ認ムヘシ若其事實混交シテ長文ナルルハ第一第二第三條ト之ヲ區別スヘシ

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト認メ其他公正ノ御裁判ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ

日本地名
年月日

原告人 氏名 花 押

若シ原告ノ代言者ナルハ左ノ如ク加判スヘシ
代言者 氏名 花 押

某
裁判所長

氏名

參看

○六年九月第三百十二號布告

訴答文例附録中訴狀宛所某御裁判所ト有之處每號トモ同第十八號書式ノ通り相定メ候條此旨更ニ布告候事

第二節 控訴上告手續

○十年二月第十九號布告

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス(本條ハ治罪法實施以後ハ自然ニ消滅ニ歸シタリ)

第三條 控訴ハ一タヒスルコトヲ得再ヒスルコトヲ得ス

第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタルハ原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナルハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ(裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ)裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得可シ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルコトヲ得

第五條 (明治十五年四月二十六日第二十一號布告ヲ以テ本條中三ケ月トアルハ總テ二ケ月ト改正ス)

地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ二ケ月(三十日ヲ以テ一月トス)ヲ過クルハ控訴スルコトヲ許サズ但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ期限二ケ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハズ

第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス

第三章

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀

ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過クレハ上告スルコトヲ許サズ
上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 被告人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第七 上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

第八 上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ届出スヘシ

第九 第一 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫

第十 第二 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ

第十一 編ノ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者

第十二 右之訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所

第十三 ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟廷ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ

第十四 取ルコトヲ得ヘシ

第十五 若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫

第十六 ヲ出シ能ハサルトキハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十七 第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金十圓ヲ大審院ニ預クヘシ若

第十八 シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第十九 第一 若シ上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ没入ス

第二十 第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタルハ預金ヲ還付ス

第二十一 第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原

第二十二 裁判ヲ破毀セサルハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ

第二十三 照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム(被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云)

第四編訴訟法 第三類代言人 控訴上告手續

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院己ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シ(大審院ヨリ郵便ヲ發ス)執行ヲ停メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ但内國人ニテ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スルハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタルハ其後二日内ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ答辨書ヲ

作り自分又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ

第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遅緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事(此章第二十六條ヨリ第三十六條ニ至ル十一ケ條

○司法省

廣島縣ヨリ米穀
貼用方ニ付伺電

米穀ニ係ル訴訟ニ
ハ証券額ヲ見積リ
從價額用スヘキヤ
印紙貼用スヘキヤ
將紙訴訟當時之實
價ニ依ルヤ

明治十七年五月一日

○司法省

米穀ニ係ル訴訟ニ
方ノ訴訟ハ後段見
込之通リ但買
ニ係ル訴訟ノ如
キハ其賣買代價
ニ依リ印紙貼用
用ス可キ者トス

明治十七年五月八日

刑事ノ上告ニ係ル件ハ治罪法ニ明條アルヲ以テ之ヲ略ス

第三節 民事訴訟用印紙規則

○十七年二月第五號布告

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス
但明治八年(十二月)第百九十六號布告訴訟用野紙規則ハ右施行ノ
日ヨリ廢止ス

第一條 凡民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スル者トス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區
別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘシ

- | | | |
|----|--------|-------|
| 金額 | 五圓マテ | 貳拾錢 |
| 同 | 拾圓マテ | 三拾錢 |
| 同 | 貳拾圓マテ | 六拾錢 |
| 同 | 五拾圓マテ | 壹圓五拾錢 |
| 同 | 七拾五圓マテ | 貳圓貳拾錢 |
| 同 | 百圓マテ | 三圓 |

○司法省

靜岡縣ヨリ訴訟
印紙貼用方之儀

諸訴ニ係ル訴訟ニ
ハ財產又ハ口証文
賣或ハ身代限取公
シ願書等御規則中
明用無之付印紙者
貼若シハ何レノ印
トセバナシ何レノ
貼用ナシ何レノ印

明治十七年五月六日

○司法省

同之趣キ身代限
伺又ハハ財產差押
リ又ハハ物品公賣
ヘ取消ス可キ願
ヲ及濟口証文ハ
前段見込之通ハ

明治十七年五月廿日

同 貳百五拾圓マテ 六圓五拾錢

同 五百圓マテ 拾圓

同 七百五拾圓マテ 拾三圓

同 千圓マテ 拾五圓

同 貳千五百圓マテ 貳拾圓

同 五千圓マテ 貳拾五圓

同 五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ

控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼スヘシ

第三條 人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用
スヘシ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ
但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戶長ノ証書ヲ所持スル者ハ裁判
官ニ於テ印紙貼用ヲ免スコトアルヘシ

第四條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

答辨書、證據物寫、辨駁書、辨論書、上申書、陳述書等証人、鑑定人、評
價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書、審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本一通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本一枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ

但裁判言渡書ノ謄本ハ一枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ一枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ズ第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三節ノ二 同定價并貼用法

○十七年二月第四號布達

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左之通之ヲ定ム

淡黑色印紙	壹枚 三錢
黑色印紙	同 五錢
赭色印紙	同 拾錢
茶褐色印紙	同 五拾錢

黃色印紙

同 壹圓

青色印紙

同 五圓

橙黃色印紙

同 拾圓

綠色印紙

同 拾五圓

嬌栗色印紙

同 貳拾圓

印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印スヘシ

第三節ノ三 訴訟用紙

○十七年三月司法省甲第一號告示

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用野紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行二拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢繙譯料ハ一枚金四圓ト相成ル儀ト心得ヘシ

第四類 喚問

○第一款

第一節 勅奏官華族喚問

○十年十月司法省丁第八十一號達

本年第七十一號布告ヲ以テ六年第四百五號布告被廢候ニ付勅奏官及ヒ華族ハ民事裁判上其家令執事ヲ喚問スヘシ若シ本人喚問イタサス候テハ事實差支アル場合ニ於テハ時々奏請ヲ經テ喚問スヘク候條此段爲心得相達候事

但勸解ニ付喚出ノ節モ同様タルヘキ事

第一節ノ二 帶勳有位者喚問

○十八年二月司法省丁第四號達

民事上帶勳有位者喚問取扱方ノ儀ニ付甲號ノ通太政官へ相伺候處乙號ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事
甲號

民事上帶勳有位者喚問取扱ノ儀ニ付伺

民事上帶勳有位者喚問取扱ノ儀ニ付テハ未タ一定ノ法規無之候然ルニ有位者喚問ノ儀ハ既ニ奏請ヲ經テ喚問取扱來候先例モ有之帶勳者ニ至テハ未タ先例無之候得共彼此同一ノ取扱振ニ可相成ハ勿論ノ儀ト存候而シテ右喚問ヲ要候時ハ本年三月廿一日付伺勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀ニ對シ御裁令ノ趣モ有之依テ民事ニ於テモ同様帶勳者ハ勳六等有位者ハ從六位以上ニ限リ其時々奏問可致儀ト心得可然哉此段相伺候也

明治十六年六月四日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

乙號

伺之通

明治十八年一月廿四日

第二節

在朝鮮國被告人ノ召喚

○十五年八月司法省丁第四十三號達

御國人民ヨリ朝鮮國人ニ對スル控訴ノ儀ニ付大坂控訴裁判所ヨリ甲

號ノ通伺出テ乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

(甲)我國人ヨリ在朝鮮國人ニ係ル控訴被告人召喚ノ儀ニ付伺大坂府下秋宗清兵衛ヨリ全府寄留朝鮮國人朴琪宗へ係リ大坂始審裁判所へ出訴ノ末別紙控訴狀(畧之)ニ掲載ノ如ク裁判ヲ受ケ之ニ服セヌ及控訴候然ルニ被告人ハ右裁判後販國致シ現今ハ釜山浦辨察衙門中ニ罷在候趣ニ付召喚ノ手續ハ當廳ヨリ直ニ彼港在留我國領事へ照會シ領事ヨリ彼ノ官衙へ移シ候順序ニテ可然哉別紙照會案(畧之)相添へ併セテ伺候間至急御指令ヲ乞ヒ候也

明治十五年七月二十二日

大坂控訴裁判所長判事清岡公張

大木司法卿殿

(乙)伺ノ趣必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セサル儀ニ付訴狀ヲ添へ領事廳へ移文シテ被告人ノ答辨書ヲ差出サシムル様可取計事

明治十五年八月二十一日

第三節

官吏ノ引合出廷

○十六年二月丁第六號達

民事裁判上引合人トシテ出廷セシメタル官吏着席ノ儀ハ明治十五年丙第三十二號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事

但人民ヨリ官廳ニ係ル訴件ニ對シ引合人トナリ出廷シタル官吏着席ノ儀ニ付テハ本文ノ限ニ無之事

參看

○十五年六月司法省丙第三十二號達

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ証人トシテ公庭へ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事但巡查及ヒ等外吏ハ此限ニアラス

○十五年三月司法省丙第十號達

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作りタル司法警察官ヲ証人トスルハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相達候事

○第二款 召喚狀送達并罰令

第一節 使丁規則

○十四年十二月司法省丁第二十六號達

第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命スルコアルヘシ

第二條 使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑札ヲ受ルモノトス

使丁ノ人員ハ使丁取締適宜ニ之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受クヘシ

第三條 使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス

第四條 使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フヘシ

第五條 使丁ハ送達ヲ爲スル裁判所ノ鑑札ヲ帶行スヘシ

第六條 送達ヲ爲スニハ其法律規則ニ從フヘシ

第七條 使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付キ代人トナリテ訟廷ニ出ルコトヲ許サス

第八條 送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラシメタルハ使丁取締其償ヲ擔當スヘシ

但使丁ノ過失懈怠ニヨルハ使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其償ヲ求ムルコトヲ得

第九條 (十五年丁第三十四號ヲ以テ本條ヲ左ノ如ク改正ス第十一條モ亦同シ)

送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其定限ヲ立ツヘシ但送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記スヘシ

第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又其他ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受候者ヨリ之ヲ拂ヘシ第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之レヲ拂フヘシ

第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フヘキ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出スヘシ

第十五條 使丁取締及ヒ使丁ハ此規則ニ違背シタル時裁判所書記局

ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡ヲ爲スヘシ

- 一 貳拾圓以下ノ違約金ヲ納メシムル事
- 二 解職セシムル事
- 三 事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムル事

第十六條 使丁取締タルニハ其裁判所々在ノ地ニ家屋ヲ有シ滿二十

一歳以上ノ者ニシテ書記局ノ試験ヲ經ルコトヲ要ス

使丁取締タルニハ身元保証トシテ金五拾圓以上ノ格價アル公債証書地券又ハ銀行其他官許アル株券証書ヲ書記局ニ納ムヘシ

但シ此保証金ハ解職ノ時下戻スヘシ

第十七條 試験ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲スヘシ

但シ書記不足ナルトキハ雇ヲ以テ之ニ充ツヘシ
試験ノ科目ハ左ノ如シ

一 使丁規則 二 請負郡村ノ地名又ハ里數 三 普通書簡ノ書類

第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限リノ處分ヲ受ケ未

又辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルコトヲ許サス

第二節 呼出遅參不參罰令

○十年一月第五號布告

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受ケタルモノノ疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スルルハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ届出ルカ又ハ無届ニテ遲參不參スルルハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第五類 訴訟入費

○第一款

第一節 訴訟入費償却規則

○九年四月司法省甲第五號布達

第一條

訴狀其外書類認料(一枚十六行十五字詰ニ付十錢但シ一枚以下モ同價)

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴訟又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書

第二條

証人並ニ引合人(明治十二年十月廿七日司法省甲第二號布達ヲ以テ差添人ニ係ル件々一切刪除ス故ニ之ヲ省ク以下倣之)手當一日ニ付五十錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條

証人並ニ引合人 滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當一日ニ付五十錢(明治九年四月司法省甲第六號布達ヲ以テ本條並ニ第六條ハ執行ヲ停止ス)

第四條

証人並ニ引合人 旅費滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

○司法省
高知縣
入費償却之儀
訴訟費用規
第八條但シキニ
八里ヲ越ユレハ
滿一里ニ付拾錢
所アルハ假令裁
ヨリ召喚ニ應ジ
ルハ更ニ一里ヨ
リ起算シ即チ九
錢ヲ給スルノ旨
ニ候哉將一里毎
金拾錢ヲ乘シ九
拾錢ト計算スル
指令
明治十七年二月廿日
明達之趣キ后段見

但シ八里ヲ越ユレハ每滿一里ニ付十錢
右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト
雖田乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スル者ノ爲メ設ク
第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五十錢
但シ八里以外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス
右定限

第二條ニ同シ

原告人又ハ被告人直ナル者ハ八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中手當一日
ニ付五十錢(第三條ノ割註ヲ參看スヘシ)

第七條

原告人又ハ被告人直ナル者旅費滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越ユレハ每滿一里ニ付十錢
右定限

第四條ニ同シ
第八條

通辨雇料 一日ニ付三圓
右定限

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ
第九條

翻譯料 (一枚ニ付十六行十五字詰一圓)
但シ一枚以下モ同價
右定限

第一條ニ同シ
第十條

測量繪圖認料
右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割

西ノ内一枚ニ付十錢

第二 長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割

西ノ内一枚ニ付十二錢

第三 長千二百間迄

百間ニ付三寸ノ割 同十四錢

第四 長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割 同十七錢

第五 長一萬二千間迄

百間ニ付一寸ノ割 同二十錢

第六 長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割 同廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セテ大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致スヘシ

但シ西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條

使賃 滿一里毎二十錢一里未滿ハ五錢

但シ歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ

者ヨリ遣ハシタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印

ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁

判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者

ノ申上ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣ハシタル使賃

第十二條

郵便並ニ電信料

定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ(町村)役場ニ納ムヘキ評價人
鑑定人等ノ日備賃金ノ諸入費及代身限諸雜費ハ臨時計算ヲ以テ定ム
右ハ前數條ノ入費ニ先チテ取立ツヘシ

第二節、 呼出狀送達費用

○十一年三月司法省丁第十號達

民事訴訟上ニ付人民喚出狀送達費用等余儀ナク一時裁判所ヨリ立替
渡シタルモノハ其時々直チニ詞訟人ヨリ取立ヘシ但裁判落着ノ上ハ
曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論タルヘキ事

○十二年十一月司法省丁第二十八號達

訴訟入費云々ノ儀十一年丁第四十四號ヲ以テ相達置候處左ノ通改達
候條此旨可心得事

訴訟入費ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキハ當然ノ事ナルニ付裁判言

渡ノ節ハ必ズ曲者ノ辨償ニ歸スヘキ旨言渡スヘシ

第二節ノ二 脚夫ノ賃錢及赤貧者ノ喚問

旅費

○十五年三月內務省乙第二十號布達

民事裁判所ヨリ人民呼出狀脚夫ノ賃錢及赤貧者被告トナリ喚問旅費
ノ儀從前郡區役所又ハ戶長役場ニ於テ繰替又ハ官費支給候向モ有之
候處自今一切不相成候條此旨相達候事

○十五年四月司法省丁第二十一號達

民事裁判上人民召喚狀脚夫賃錢及赤貧者喚問途中旅費支出方ノ儀ニ
付明治十年本省丁第八十六號達ニ及置候處嚮ニ內務省ヨリ協議有之
今般同省ニ於テ乙第廿號ノ通府縣ニ達相成候條此旨爲心得相達候事

○第二欸

第一節 裁判費訴訟費償却例

○十二年三月司法省丁第十號達

裁判費訴訟ノ儀ニ付別紙ノ通大審院ニ相達候條此旨爲心得相達候事

大審院へ達(明治十二年三月十三日)

裁判費訴訟價ノ義過般及答議候處右ハ取消シ別紙ノ通相達候事

別紙

〔第一例〕

初告ニテ(原告甲勝 被告乙負) 乙入費ヲ拂フ

控訴ニテ(原告甲勝 被告乙負) 甲ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ

(破毀セス) 上告ニテ(原告甲勝 被告乙負) 甲ハ總テノ入費ヲ拂フ

〔第二例〕

初告ニテ(甲勝或ハ負トモ 乙負或ハ勝トモ)

控訴ニテ(甲勝 乙負) 甲ハ初告控訴ノ入費ヲ拂フ

(破毀ス) 上告ニテ(甲勝 乙負) 乙ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マテノ

乙ノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返スヘシ

〔第三例〕(此例ハ大審院ニ於テ破毀シタル後第ニノ上等裁判所ニ移シタル場合ナリ)

此時負者ハ初告ト第一控訴第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フ

ヘシ上告入費ニ至テハ其上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者

ハ之ヲ拂フヘキニアラス

證内訓類聚

大日本六法類編

中編

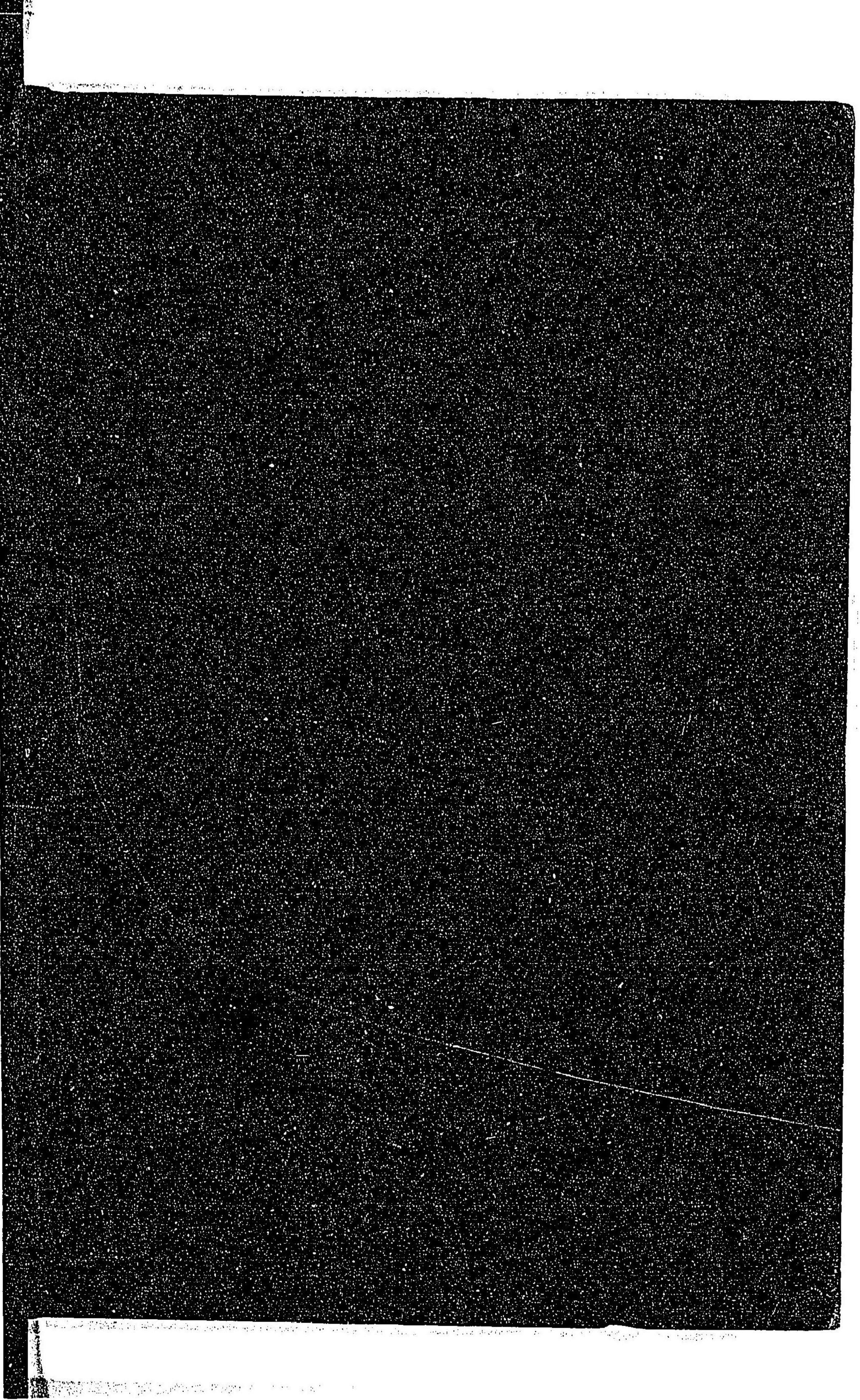
民法訴訟法

大尾

2/5/39

五百卅三

147
22



14.7

22

禁電子式複写

